人がいて、街があって、豊かな社会があり、快適な生活がある。
　そんな私たちのくらしも、そう、調和をめざす技術の力で支えられているんですね。
上の絵は、小学6年生のCG(コンピュータ・グラフィック)アーチスト、
　瀧本大介くんが描いてくれた「ロボット・ハウス」。
おうち全体がロボットになっていて、どこにでも行けるんですって。
　次の、次の世紀くらいかな。こんなロボットが大活躍する日だって、来るかも知れません。
夢を見る力。夢を叶える力。未来へ、つづく。日立です。

ロボット・ハウスのお通りだい。

人と技術の理想をめざす
Interface

株式会社 日立製作所

アジアハンドボール選手権大会開催日、開催地決定

去る４月22日にアジアハンドボール連盟より今年度開催される第７回男子、第４回女子アジアハンドボール選手権大会開催について右の通り決定の連絡があった。

男子	９月24日〜10月５日 バーレン（マナマ市）
女子	８月12日〜18日　中国（汕頭市）

第1回JOCジュニアオリンピックカップハンドボール大会

最優秀選手に選ばれて

男子

函館市立凌雲中学校ハンドボール部 ★★★★★★★★ 三田　誠

名前を呼ばれたとき、正直いっておどろきました。と同時に頭の中をかけめぐったものは、準決勝の自分の姿でした。何をあせっていたのかミスの連続。チームメイトに迷惑ばかりをかけているそんな姿でした。本当に自分なのだろうか、もしかして誰かと名前をまちがえたのでは、などと何度も自分自身に問いかけました。優勝したことも、夢の中のできごとのような感じでした。ましてこんなすごい賞をもらうとは、本当に現実のことなのか一瞬とまどいがありましたが、言葉に表わせないほどの感激でした。

しかし、この感激も僕一人の力で得られたものではなく、チームを代表する形で僕に与えられたものだと思っています。ハンドボールを始めて1年半でここまでこれたのは、チームワークの良さ、そして、監督のきびしい指導があったからだと思います。

今、北海道に戻り、この大きな喜びをしみじみとかみしめています。しかし、僕に与えられた大きすぎる期待と、責任の重さに、どんな形で応えることができるのでしょうか。今までの自分を振り返りながら、明日からの自分に、謙虚な気持ちを忘れず、さらにきびしい態度で、練習に取り組もうと思っています。

今回対戦したチームには、個人プレーヤーとして、優れた選手が何人もいました。学ぶべき点も数多くありました。しかし、その中でより強く感じたのは、ハンドボールはチームワークの競技だという事です。一人ではどうしようもありません。僕たちのチームの中で僕がずばぬけている訳でもありません。同じ様な力をもった仲間が、皆それぞれの力を出しきれたことが勝利につながったのだと思います。今後は、ハンドボールの選手としてだけではなく、中学生として恥じない生活を送り、より高い目標に向かっていこうと思います。

女子

岩国市立河内中学校女子ハンドボール部★★★★★★ 藤長　靖子

「最優秀選手賞、岩国市立河内中学校、藤長靖子さん」。

私は何も知らず、特別賞を受けるチームメイトの芝明美さんのつきそいとして、閉会式に出ていました。芝さんが受賞したあと、最優秀選手賞の発表で私の名前が呼ばれた時、とてもおどろいて目の前が真っ白になり、本当に自分なのか信じられませんでした。でも目録とトロフィーをもらった時、天にも昇る心地でした。

この試合で私たちのチームは２回戦で開催地の玉出中に負けてしまい、涙を流してしまうほどくやしい思いをしました。それと同時にいろんな課題も見つかりました。

試合も終わり、時がたつにつれて私が受けたこの賞の偉大さをひしひしと感じています。

私がこのようなすばらしい賞を受けることができたのは、決して私一人の力ではなく、まわりの人たちのおかげです。いそがしい中、熱心に指導して下さったコーチの織田先生、心底から私たちのことを考えて下さった顧問の小坂先生、力をぬかずに相手をして下さった岩国商業高校のハンドボール部員の人たち、その他いろいろな方々…。なにより私がここまでこれたのは、苦しい練習でいっしょに汗を流し、試合でもいろいろアドバイスをしてくれたチームメイトがいたからだと思います。練習でディフェンスをしてくれたレギュラー以外の人や、試合でテーピングを切ってくれた人たちに、私は一番感謝しなければいけないと思います。

試合に負けた時のくやしさ、そして私を支えてくれたたくさんの人たちへの感謝の気持ちを忘れないと同時に、このすばらしい賞をいただいたことをはげみに、いままで以上に一生懸命練習して、最優秀選手賞にはじない選手になりたいと思います。

★第1回JOCジュニアオリンピックカップ・ハンドボール大会観戦記★

夢と感動との出会い

日本オリンピック委員会選手強化本部常任委員　市原　則之

第1回JOCジュニアオリンピックカップ・ハンドボール中学生大会の成功を心からお慶びし、同時に大会開催に当りご尽力された関係者の皆様に深く敬意を表します。

ご承知の通りJOCでは、選手強化事業ジュニア対策の一環として、将来オリンピック競技大会や世界選手権大会等で活躍が期待できるジュニア選手を発掘・育成するために「JOCジュニアオリンピックカップ事業」として各競技団体を支援することになりました。この主旨を逸速く理解し実施の判断を下した日本協会や、紆余曲折の中にも勇気を持って実行に当った中体連、並びに大阪協会の皆様に心から感謝する次第であります。

スポーツには〝夢と感動〟がなければと言われますが、当大会を観戦するに当り、忘れかけていた純真なスポーツマン魂が刺激され、目に涙さえ浮かぶ感動の場面に出合う幸せを得ました。また、選手の競技に対する直向きな姿や、ここまで熱意をもって育てられた指導者に接し、スポーツ教育の重要性を再認識させられました。つまり、一般にスポーツを行うに当り三つの効用があると言われますが、その効用とは、

一、逆境に強くなる（スポーツは筋書のないドラマ、常に緊張と逆境の中でプレーし、よって不屈の精神が養われる）。

二、フェアプレーの精神が醸成する（レフェリーによって公平に裁かれ、忠実なプレーに徹する）。

三、よい友を得る（チーム内では、労り合い、助け合い、励まし合うチームワークでの友情が生まれ、競技の中では、相手の痛さ、苦しさ、悲しさを知り終生の友達を得る）。

以上のことが充分備われば、単に技術的に、将来性豊かなジュニア選手を啓発し、国際舞台において世界のトップアスリートたちに伍して競技できる選手の育成のみでなく、スポーツを通して、友情・連帯感・フェアプレーの精神をもって相互に理解し合う、いわゆるJOCの求める「オリンピック精神」の高揚に結びつくものだと考えます。

こうした意味に於いて、当大会で初回の男女優秀選手に選ばれた北海道選抜の三田誠君と、山口県河内中学の藤長靖子さんは、この大会の主旨に添って当然選ばれるべきして選ばれた選手であったと断言できます。

男子の三田君は、オリンピック有望候補選手にも指定され、現在でも超高校級の身長を有し、また将来、もっと伸びるであろうという体形に恵まれ、しかも学業優秀で、指導に当られている先生が保証される程の素直な性格の持ち主と聞けば、近い将来必ず日の丸をつけて世界の檜舞台で活躍してくれそうな期待と夢を与えてくれる近年稀な選手でした。

また、女子の藤長さんは、小柄ながらも抜群の運動神経で鋭いフェイントと力強いシュート力を有し、将来代表選手として日本独特なスピード豊かなハンドボールをしてくれるであろうという期待を与えてくれる選手でした。それから、特筆すべきことは、神田大阪協会長より特別賞が贈られた芝明美（山口河内中）さんである。彼女の一挙手一投足が総ての観衆の胸を打ち、ハンディのある体を十二分に駆使してプレーする姿は、多くの人々に感動と人生への勇気を与えてくれました。正にスポーツ精神で一番大切な逆境に挫けない不屈な精神の持ち主であり、またこうした我々の称賛が彼女には迷惑であるような健全な心も兼ね備え、将来の人生を力強く生きていくであろうと確信した素晴しい選手でした。

その他、将来を期待されるオリンピック有望候補選手に、北海道選抜の沢田俊祐君と、大阪府玉出中学のGK鈴慶子さんの優秀選手二人が選ばれ、将来を嘱望されております。

しかしながら前述の4名だけでなく、今大会に参加した男女290名の選手の中には沢山の有望選手が含まれ、将来日本ハンドボール界の中枢で活躍してくれるであろう楽しみを抱かせてくれました。

尚、チーム優勝は、地域の優秀選手をピックアップして練習を重ねた選抜チームに一日の長があり、男子・北海道選抜、そして女子は富山選抜がそれぞれ優勝し、真新しい優勝旗を持ち帰りましたが、単独チームで準決勝まで進んだ男子の沖縄県神森中学や、同じく女子で決勝まで進んだ熊本県の佐伊津中学の活躍も特筆すべきものがありました。

以上の通り、第1回大会は幾多の感動と沢山の思い出を残した意義ある大会となり、関係者の一人として大変嬉しく思っております。

どうか、来年、再来年と回を重ねる毎に、当大会から沢山の心身共に優秀で、将来を託せる有望選手が生まれることを願い、最後に当大会開催に当りご尽力頂いた関係各位に、重ねて厚く御礼を申し上げさせて頂きます。

精一杯のパフォーマンス

日本ハンドボール協会強化委員　蒲生　晴明

1、はじめに

　1992年度の最後を飾って、大阪府堺市において標記の第1回JOCジュニアオリンピックハンドボール大会が盛大に開催されましたことは、我々ハンドボールに携わる者にとって、このうえない喜びでした。地元堺市をはじめ、大阪ハンドボール協会・地元ライオンズクラブの皆々様、日本協会、関係者の方々の絶大なるご支援、ご厚情により、実現したわけですが、そのご尽力に対しまして、深く感謝するところです。

　さて、記念すべき第1回大会の開会式で「激励の言葉」を話す栄をいただきましたが、そこで、選手たちに将来大きな「夢」と「目標」を持つことを話しました。さらに、「心・技・体」それぞれについて、ひとつずつお願いをいたしました。

　「心」…大好きなハンドボールを継続すること

　「技」…先生が何をポイントに指導しているか良く理解してプレーすること

　「体」…良く食べること

　以上の3点ですが、精神的にも身体的にも成長が著しいこの時期に、相応しい言葉だったかと思いますが、私の素直な気持ちでした。将来の日本を代表する選手に育っていくことを楽しみに期待していたいと思います。

2、大会観戦について

　全国の中学生が、この時期にコート狭しと精一杯のパフォーマンスを見せてくれました。強化担当のものとして、たいへん逞しくまた微笑ましくも感じました。

　今大会は、将来のオリンピック選手を発掘することとジュニア層の普及発展も含めた意味の大会でありましたが、そのとおり近年になく素晴らしい選手が数多く参加し、ハラハラ、ドキドキの内容のあるゲームが繰り広げられました。中でも、身体ができつつあるこの時期において(13~14才)、しっかりしたプレーをしていることに感心した次第です。私は、ハンドボールを始めたのが高校に入学してからだったので、「中学生でもこんなに素晴らしいプレーができるのか!」と驚かされました。そう言った意味で、指導された先生方の情熱と指導力に対して敬意を称したいと思います。

　次に、ゲームの中で気が付いた良かった点と気になった点を挙げますと、

◆良かった点

　(1)40分のゲームスタミナが十分ある。

　(2)ゲームの流れを自分たちで感じとっており、勝負のポイントを心得ている。

　(3)基本的な動作を忠実に実行しようとしている。

◆気になった点

　(1)パス・キャッチの基本動作・フォームが未成熟

　(2)ボディーコントロールの基本動作として、特にストップのフォームとその方法

以上、気が付いた点をダイレクトに述べましたが、13~14才の選手がゲームの流れまでコントロールしていることに驚かされたのですが、果してこの事が今必要であるかどうか(?)考えさせられました。また、基本動作について、忠実に実行しようとしていますが、ハンドボールの経験年数が浅いこともあって、現時点では発展途中と感じました。しかしながら、基本のフォーム構築は、ハンドボールを始めたときにこそ、充分にジックリ時間を掛けて実施するべきであると考えるところです。ナショナル選手にも基本動作について、矯正ができないままのものがいるのも事実であります。色々とお話を聞きますと、基本練習ばかりだと「飽きてしまう・辞めてしまう」という現象が起きるそうですが、ぜひ、楽しい基本練習・愉快な基本トレーニングを考えてみてください。私見ですが、ナショナル選手に指導する基本も中学生・小学生に指導する基本も変わるはずはないのです。例えば、野球の場合、バントの仕方がプロ選手と中学生で異なることはないはずです。そう言った意味で、指導方法・手段が違うだけであり、基本動作は変わらないはずです。どうか、手を変え品を変え、選手たちが興味を示すようなユニークな基本トレーニングを考案し、底辺の拡大と素晴らしい選手の育成に役立ててください。

3、まとめ

　おわりに、日本がアジア・世界で勝っていくにはジュニア層以下からの発掘・指導が不可欠です。ぜひ、ハンドボール界がこの件に関して、英知を結集して今大会の継承と選手育成に努力されることをお願いしたいと思います。

　最後になりましたが、今大会のためにナショナル選手を派遣していただいた各チームの関係の皆様に、厚くお礼申し上げまして、観戦記とさせていただきます。

取り組む態度や姿勢に好感

日本ハンドボール協会強化委員　樫塚　正一

第1回JOCジュニアオリンピックカップが2月下旬、大阪市堺に於いて開催されました。JOCが中学生を対象として各種目から将来の日本スポーツ界を担う選手の発掘を目的とする大会で、興味深い観戦になりました。

中学生の大会を本格的に観ることは久しく、大きさ、運動の能力、技術、試合展開の総てに未知で、関係する諸先生方に現状を教えてもらいながらの観戦でした。

中学時代は、3年間の期間で身体の変化が著しい時であり、中学生の指導は我々が想像する以上に難しく、個別指導は繊細でなければいけないと教えて頂きました。

今大会は1、2年生で参加しており、1年生と2年生の違いは大きく、男女の比較では男子が大きく、骨格も太くたくましい身体付きが眼につきました。女子は可愛い感じが印象的です。男子に比べ、1回戦から決勝戦までを観戦して感じたことは、試合では展開途中の所々のミスも少なく、上手にボールを運んでいたこと、2回戦以後は展開も早く、変化にも眼をみはるものが有りました。男子では最終的であるシュートもダイナミックであったり、シャープであったりして、使っているテクニックのおもしろさに驚き、また取り組む態度や姿勢にも好感がもて、新鮮な気持ちで試合展開を見ることができました。

攻撃を行って、シュートが得点に結びついた時の笑顔のすがすがしさを忘れることは出来ません。

近年、パワーや速さを追求する試合の展開が一般的な傾向となり、その為に防御活動がラフとなって警告や退場が多い。大会では、この様なラフなプレーも少なく、手の使い方に対する指導がよく行き届いていることに感心した。男女共まだ完成された身体や技術の使い方では無く、この年代には無理なプレーを見ることもあったが、全般的には自分たちの環境に合った技術の選択が出来ていたように思います。男子にはパワーハンドボールが眼につき、女子には柔らかいコンビの組み立てを技術の中に見ることが出来た。試合展開で、1日目の試合コートが少し短く、女子には短いコートの方が展開の速さ、プレーの継続も、相手コートに到達する時間の長さも丁度よく、無理なくゲームを行っているように思えた。

男子は力が有り、短いコートでは長さが短すぎ、攻撃から防御に変わる時間が短く、防御の体勢を作ることが大変であった。この年代の試合を男子は正規のコートで、女子は短いコートでの実施の希望を伝えます。

試合会場は応援する人たちであふれ、2日間すごい熱気につつまれておりました。大会を準備された関係諸氏も、準備期間の短さに大変な御苦労が有ったと聞き、出場したチームの出場枠や諸経費のことが大変困難をきわめたとも耳にして、大会の意図が達すると同時に関係する現場の諸氏が充実感や満足感を得られる大会へと発展することに期待を持ち、観戦記を終わりたいと思います。

'94広島アジア大会

初優勝に向かって

男子ナショナルチーム監督　蒲生　晴明

1993年度男子ナショナルチームのメンバーの選考を3月に実施したところ、日本リーグプレーオフの直後、また年度の変わり目にもかかわらず、社会人・大学生とも負傷者を除き全員参加で行うことができました。これもひとえに所属の皆様のご支援、ご協力、ご理解の賜物と深く感謝いたします。

さて、選手たちは、その意欲と希望に満ちて、繊細なプレー・身体を張ったプレー等場面場面で好プレーを実施して大いに自分をアピールしていました。指導する側として、このような環境が最高と考えているわけですが、大変頼もしく思えるところです。結果については、次にご紹介するわけですが、今回は、来年（1994年）広島で行われるアジア大会の第一次候補選手として選考いたしました。今後、強化を実施していく中で最終的に代表を絞り込んでいく予定です。

選手たちが競い合い、その座を自分自身の手で勝ち取って、更にアジアNo.1（アジア大会優勝＝金メダル）になることがターゲットであります。そしてこの結果がアトランタオリンピック出場への自信に繋がるものと考えております。どうか、皆様の熱いご支援、ご声援をよろしくお願いいたします。

そのためにも、本年は、限られた期間のトレーニングになりますが、各チームでの個人トレーニング等を中心に選手たちが、自分自身で計画を立案し実施していきます。したがって、所属の皆様のご支援、ご激励をよろしくお願いいたします。

最後に、93年度の男子ナショナルチームのスローガンと指向重点を紹介して結びといたします。

男子ナショナルスタッフ

役職	氏名	生年月日	所属
監督	蒲生　晴明	1954.4.5	大同特殊鋼
ナショナルA ヘッドコーチ	田口　隆	1961.7.23	本田技研工業
ナショナルA コーチ	関　健三	1955.1.24	三陽商会
ナショナルB監督 兼Aコーチ	松井　幸嗣	1957.7.6	日本体育大学
ジュニア監督 兼Bコーチ	高橋　精一	1949.6.2	桃山学院高等学校
ナショナルB コーチ	奥田　新治	1961.6.11	湧永製薬株式会社

●スローガン●

＊CREATIVE THINKING……………………創造
＊REAL ACTION………………………………実行
＊BE SUCCESSFUL……………………………成果

●指向重点●

＊基礎体力＆精神力の向上
＊基本技術の反復
＊プレーのスピード化

1993年度男子ナショナルA選手及び'94アジア競技大会第1次候補選手

G・K	橋本　行弘
	林　康一
	河野　裕光
C．P	魚住　和彦
	梅基　幸一
	末岡　政広
	田中　茂
	高木　浩司
	渡辺　浩
	三輪　澄高
	林　昌英
	田中　雅彦
	源内　利之
	平松　茂雄
	中山　剛
	佐藤壮一郎
	高田　浩志
	岩本　真典
	小沢　勝利
	永山　強
	富本　栄次
	広政　宜孝

1993年度 男子ナショナルB選手

G・K	荒木　進
	坪根　敏宏
	日原　一幸
C・P	福村　正己
	笠　哲也
	小河原洋行
	小野　優
	藤井　孝志
	満井　健康
	森岡　健二
	日原　正和
	木浪　達文
	市原　剛次
	辻　昇一
	笹浪　重俊

奥田新治　ナショナルBコーチ

高橋精一　ジュニア監督

松井幸嗣　ナショナルB監督

関　健三　コーチ

田口　隆　ヘッドコーチ

蒲生晴明　監督

1993年 ナショナル選手全紹介

①生年月日②年令③ナショナル入り年度④国際試合数⑤身長⑥体重⑦利き腕⑧所属⑨出身地⑩出身校⑪ニックネーム

GK

●橋本行弘（はしもと・ゆきひろ）

①S40年9月17日②27才③S59年④110試合⑤186cm⑥80kg⑦右⑧本田技研⑨愛知県⑩岡崎城西高校⑪ハッシー

▽**寸評**＝現日本チームのキャプテンとして、チームメイトを充分にまとめている。アジアNo.1になるための精神的なファインプレーに期待。

▼**抱負**＝アトランタ五輪候補メンバーに指名された時は、はっきり言って困惑しました。年齢的にも最年長という事で、若い選手の考え方・感性・体力等の違いを感じるし、なによりも今まで（ソウル・バルセロナ）全日本で共に活動して来た私と同世代の選手たちがすべて卒業していった事で、変に責任感や不安感を覚えたからです。でも今はそれら全部を発奮材料にする事で自分自身への〝やりがい〟に変えることが出来ました。もう一度真っ赤に燃えたい。

●林　康一（はやし・こういち）

①S42年3月3日②26才③H3年⑤181cm⑥78kg⑦右⑧大同特殊鋼⑨福岡県⑩福岡大学

▽**寸評**＝ゴールキーパーとして、体格では劣るが、そのキーピングは迫力満点。キープ率50％が目標である。課題は、確実性とコンビネーション。

▼**抱負**＝全日本がアジアでNo.1になり、オリンピックに出場するためには、韓国、中国に対して30得点以上取れる攻撃力と、25点以下に失点を抑えるDF、GKが必要だと考えられる。そこでGKである私自身の役割は、一本でも多く相手シュートを阻止する事であるが、特に全日本チームのDFシステム上、サイドシュートの本数が増えると考えられるので、サイドシュート阻止率7割以上の目標を挙げ、アジア大会で達成させます。そしてこの延長上にオリンピックでのメダル獲得が見えてきます。

●河野裕光（こうの・ひろみつ）

①S44年6月16日②23才③H2年④2試合⑤186cm⑥85kg⑦右⑧湧永製薬⑨島根県⑩中京大学⑪のほほん

▽**寸評**＝ゴールキーパーとして経験が浅く、これからが本番である。課題は多いが、一つ一つクリアする事が今は大切。

▼**抱負**＝ナショナルチームに入ったからには、世界のトップレベルの試合に多く出場したい。そうなるという事は、必然的に橋本さん、林さんを引きずり降ろして正ゴールキーパーの座を獲得しなければならない。来年、地元の広島で開かれるアジア大会に出場し、そしてそのゴールには私が立っていられるようにし、決勝が終った時、胸にかかっている金メダルを見ていただけるように頑張ります。

CP

●魚住和彦（うおずみ・かずひこ）

①S41年10月24日②26才③H2年⑤188cm⑥80kg⑦右⑧大崎電気工業⑨熊本県⑩東海大学⑪ウオ

▽**寸評**＝スピードとパワーでは、全日本チームの中でもNo.1である。今後の課題は、スタミナの養成とコンビネーションプレー。

▼**抱負**＝全日本チームの最大目標は、アジアのチャンピオンになる事である。それには、韓国に勝つ事が絶対条件になる。韓国のスピードに対抗するには、やはりそれ以上のスピードをつけることである。はじめはミスが多いかもしれないが、慣れることによりミスが減った時、大きな力になるに違いない。スピードをつけるための一つとして基礎体力アップを挙げる。最初の合宿で行った体力テストの成績の30％アップを目標に取り組みます。

●梅基幸一（うめもと・こういち）

①S42年2月25日②25才③H3年⑤182cm⑥76kg⑦右⑧本田技研工業⑨京都府⑩大谷高校・大阪体育大学⑪ウメ

▽**寸評**＝昨年1年で成長したプレーヤーである。体格的には決して大きくないが、運動量ではチームNo.1。ディフェンスの要として期待される。

▼**抱負**＝今年度もナショナルチームの選手として選ばれ、DFでのセンターバックとしての中心的役割と、OFでのポストのスペシャリストを目指して、〝継続こそ力なり〟をモットーとして日々努力していきたいと思います。当面の目標は、今年の夏のアジア選手権での優勝です。それに向けての15％筋力アップと、基礎技術の習得、徹底を行い、他のアジアの国に負けない様頑張ります。

●末岡政広（すえおか・まさひろ）

①S42年9月1日②25才③H4年⑤176cm⑥77kg⑦右⑧大同特殊鋼⑨長崎県⑩福岡大学⑪スエ

▽**寸評**＝日本を代表するゲームメーカーとして、成長してほしい。これからの課題は、プレッシャーのかかった時の創意工夫と、スピード強化。

▼**抱負**＝全日本選手の一員として1年間が過ぎ、この1年間でいろいろな事を学び、自分なりに成果があったと思う。技術面・精神面においても自信が持てる様になり、余裕を持ってプレーする事が出来る。自分の場合は、センターとしての自分が死んで他人を生かす役割よりは、自分が生きるために他人を上手に利用する方が好きです。これからはじまる大会に向けて、計画的にトレーニングを行い、結果を出しますので、応援の方よろしくお願いします。

●田中　茂（たなか・しげる）

①S42年9月2日②25才③H元年⑤182cm⑥77kg⑦右⑧三陽商会⑨長崎県⑩筑波大学

▽**寸評**＝全日本チームの中でも中心的な選手として、昨年1年で成長した。これからは、全ての面で模範となるように期待している。

▼**抱負**＝新生全日本の中でも年令的にも経験でも上の方なので、チームでのリーダーシップをとり、チームをまとめていく存在になる。プレー面では私の場合、体格もあまり大きい方ではないので、私の得意とするスピードプレー、フェイントプレーを磨いていく。DFにおいても、闘争心を全面に出したアグレッシブなプレーを目指す。熱いハンドボールを観せます。

●高木浩司（たかぎ・こうじ）

①S42年9月17日②25才③H3年⑤181cm⑥70kg⑦左⑧中村荷役運輸⑨兵庫県⑩日本体育大学⑪アニ

▽**寸評**＝サイドシュートのテクニック・スピードはすばらしいものがある。今後、期待する一人。課題はアシストプレーと正確性・守備力。

▼**抱負**＝今年1年、ナショナルチームの一員として、とにかく自分に負けない様、常に自分に厳しくトレーニングに励む事がナショナルチームの勝利につながる近道だと思います。まだ公式国際試合の経験はありませんが、出場したら多彩なサイドシュートを決めます。広島で行われるアジア大会、オリンピックのアジア予選では絶対に金メダルを取り、本番のアトランタオリンピックではメダルが日本の手に渡る様、私を含めメンバー全員、力を合わせ、勝ちに行きます。

●渡辺　浩（わたなべ・ひとし）

①Ｓ42年10月20日②25才③Ｈ4年④14試合⑤183㎝⑥73㎏⑦左⑧三陽商会⑨東京都⑩日本大学⑪ナヘ

▽**寸評**＝全日本チームの元気者として急成長した一人である。これからは正確なプレーとアシストプレーに期待。努力・努力の姿は期待感一杯だ。

▼**抱負**＝昨年5月から全日本に入り、海外遠征も数回経験しました。中でもヨーロッパ勢に初めて勝った瞬間、なんとも言えない気持がしました。これが勝利の味なのかなと思いました。この気持ちをアジア大会、オリンピック予選と現実のものにして行きたいと思います。日々、自分に負けぬ様、全力で努力して行きます。

●三輪澄高（みわ・すみたか）

①Ｓ43年1月31日②25才③Ｈ4年④0⑤188㎝⑥84㎏⑦右⑧トヨタ自動車⑨愛知県⑩同志社大学⑪スミちゃん

▽**寸評**＝基礎体力も十分にあり、突進力を生かしたプレーはすばらしい。これからは他のプレーヤーを使ったコンビネーションが課題。

▼**抱負**＝とにかくアジアのチャンピオンになるため何事も前向きに取り組み、自分のモットーである全力投球・全力疾走をする。今後の課題としては、積極的な反面、熱くなりすぎると視野が狭くなるので、余裕を持ち、状況の判断ができるようにする。技術面では右45度のポジションに定着できるようカットイン、遠めからのクイックシュートのスピードに磨きをかけ、最後まで絶対にあきらめないプレーをします。とにかく前進あるのみ。

●林　昌英（はやし・まさひで）

①Ｓ43年7月31日②24才③Ｈ4年④0⑤181㎝⑥68㎏⑦右⑧日新製鋼⑨長崎県⑩国士舘大学⑪スリム

▽**寸評**＝持ち前のハンドボールセンスは抜群のものがあり、日本のコントロールタワーとして活躍が期待されている。基礎体力をつけること。

▼**抱負**＝センターというポジションをやっているので、気配りのあるプレーを行い、他にもチームの選手がプレーしやすいようにゲームメイクをして行きたい。からだが小さいので、スピードとテクニックでカバーして、ポストとのコンビネーションを取りたい。魅力ある選手になりたい。

●田中雅彦（たなか・まさひこ）

①Ｓ43年9月21日②24才③Ｈ3年④5試合⑤185㎝⑥80㎏⑦右⑧湧永製薬⑨福岡県⑩久工大附・福岡大学⑪マサ

▽**寸評**＝ディフェンスの中心として、チームのリーダー格。スピードとシュート力の強化が最大の課題。

▼**抱負**＝自分のポジションがポストであるので、世界はもちろんチーム内でNo.1のポストマンになるように努力する事と、ディフェンスではチームの中心となり、人から信頼されるディフェンダーになりたいと思います。そのためには今後、数多く学ぶべき事、またそれを自分の本当の力にすることなど、課題はありますが、心を鬼にして夢であるアトランタオリンピック金メダル、またアジアNo.1に向け、突き進みます。まだまだ足りない努力を積み重ねるしかありません。

●源内利之（げんない・としゆき）

①Ｓ43年10月12日②24才③Ｈ4年④17試合⑤181㎝⑥78㎏⑦右⑧日新製鋼⑨山口県⑩大分電波・国士舘大学⑪ゲン

▽**寸評**＝昨年一年で、急成長した一人である。勝負強さが特長。ここ一番、頼りになる選手である。今後の課題は、アシストプレーに磨きをかけること。

▼**抱負**＝今自分は、全日本チームの一員として、アトランタオリンピックを目標に頑張っているが、その前にアジアでNo.1にならなくては、オリンピックに出場する事が出来ない。そのために今、自分がやらなくてはいけない事は、体力を向上させる事だ。その重点項目としてジャンプ力・握力・背筋力・投力を現状の15%アップを目標に実行し、成果を出し、必ずアジアNo.1になり、オリンピックの

出場権をこの手に掴む事が出来る様に頑張ります。

●平松茂雄（ひらまつ・しげお）

①S43年10月27日②24才③H4年④6試合⑤182cm⑥70kg⑦右⑧本田技研工業⑨愛知県⑩中京高校⑪ヒラ

▽**寸評**＝身体的には細身であるが、ゲームメーカーとして独特のものがあり、トリッキーなプレーに磨きをかけ、かつ正確性が課題となるだろう。

▼**抱負**＝センターというポジションは、チームの中心であり、またゲーム中コートのなかでの監督、コーチ的な役割をするポジションでもあると思いますので、日頃のトレーニングの中から、スタッフの言われる事をよく理解し、その時々や場面に合った指示の声、動きをし、スタッフそしてチームの全員に信頼されるようなセンターになります。そのためにはまだまだ勉強しなければならない事が沢山ありますが、一歩一歩やって行きたいと思います。そして、夢はオリンピックで優勝であり、目標はアジアNo.1です。

●中山　剛（なかやま・つよし）

①S44年7月4日②23才③H元年④60試合以上⑤191cm⑥85kg⑦右⑧湧永製薬⑨福岡県⑩福岡大学

▽**寸評**＝日本のエースと呼ばれる存在である。その体力・闘争心は、天下一品。課題はケガの完治と正確性。ハンドボールファンの期待に応えてほしい。

▼**抱負**＝これまで、ナショナルの大会へ数多く出場して来て、自分のシュートでも十分通用することは分かりました。しかし、まだ確率が悪く1試合の平均も5点を下回ると思います。やはり世界のトップチームを相手にしても7～8点以上の得点を平均で取りたいものです。そのためにも、まず足のケガについても考えていかないといけないし、自分の売り物のロングシュートをもっと磨き、国際試合の出場数や得点数の記録を塗り替えて行きたいと思います。そして世界のトップシューターの中に、名前を残せるプレーヤーを目指します。

●佐藤壮一郎（さとう・そういちろう）

①S44年8月7日②23才③H4年④10試合⑤178cm⑥76kg⑦右⑧大同特殊鋼⑨東京都⑩日本体育大学⑪ソウ

▽**寸評**＝最近、徐々に力をつけてきている若手の元気者。チームに活力を与えるムードメーカーとして、逆境時のプレーに期待している。

▼**抱負**＝現状では、身体が全日本の中でも小さい方なので、技術的には理解出来ているプレーでも、パワーで押し切られる事が多数ある。それを克服するためには、日常の筋力トレーニングを行い、日本人は元より外国人をも引きずり回せるパワーを持つ。他には、ポストでボールを持ったら、何かやってくれるような仲間や観客に期待されるプレーヤーを目指す。私のセールスポイントとしては、元気なのでチームが逆境に立った時は、持ち前の明るさで流れを変えたい。

●高田浩志（たかだ・ひろし）

①S45年2月10日②23才⑤180cm⑥76kg⑦右⑧湧永製薬⑨熊本県⑩東和大学

▽**寸評**＝センタープレーヤーとして勉強中であるが、個人的な能力は素晴らしい。今後は、人を動かすテクニックを身につけてほしい。

▼**抱負**＝アジアのチャンピオンになり、オリンピックに出場するために、これから十分な基礎体力をつけ、今課題の一つであるスピード、これを自分のものにし、足でかせげる選手を目指したいと思います。また、現在センターというポジションをやっていますが、ここに必要な指示・指摘・指導・気配りが出来るよう、普段の生活から意識し、精一杯努力し、一つでも多く国際試合に出場し、「勝つ」という事に常にこだわって行きたいと思います。

●岩本真典（いわもと・まさのり）

①S45年9月28日②22才③H2年⑤197cm⑥87kg⑦左⑧三陽商会⑨熊本県⑩早稲田大学

▽**寸評**＝若手の中でも期待される一番手の選手である。長身から投げおろすシュートは迫力満点。今後は、基礎体力アップが非常に重要。

▼**抱負**＝全日本入りは大学1年の時だったが、それから3年間は学生のスケジュールと合わず全日本の活動はしていなかった。今春から日本リーグに所属し、全日本での活動が新たにスタートした。自分のプレーがどれだけ全日本で、また世界で通用するか楽しみでもあり、自信もある。まずは全日本選手という自覚を持ち、周りから頼りにされ、ハンドボール界の顔となる選手になりたい。そしてアジアNo.1を目指す。

●小沢勝利（おざわ・かつとし）

①S46年6月2日②21才③H4年⑤6試合⑤180cm⑥70kg⑦左⑧日本体育大学⑨神奈川県⑩横浜商工高校

▽**寸評**＝大型ではないが、巧みなシュートテクニックは魅力ある。

今後の課題は、ディフェンス力と体力アップである。

▼抱負＝自分は去年からナショナルチームに選ばれ、今年も選ばれてとてもうれしいです。それは、ハンドボールをはじめてから、ナショナルプレーヤーになることが夢だったからです。そして去年、極東大会に出場しましたがケガをしてしまい、活躍出来なかったので、今年は大会に出場できたら、ケガをしないようにすることと、試合で大活躍をすることが目標です。それから今までの夢がナショナルプレーヤーだったから、新たな夢はアトランタオリンピック金メダルです。

●永山　強（ながやま・つよし）

①S46年9月9日②21才③H5年④0⑤178cm⑥70kg⑦右⑧順天堂大学⑨埼玉県⑩浦和実業学園高校

▽寸評＝基礎体力は抜群によく、全日本チームでも上位クラスにランクされている。しっかりした技術を身につけ、さらに成長を期待している。

▼抱負＝今回、ナショナルチームに初参加ということで、期待と不安でいっぱいです。自分の最高のプレーをすることがチームに一番貢献できる事だと思うので、一生懸命頑張ります。また、やるからには、勝ちにこだわって、常に上を目指してやっていきます。

●冨本栄次（とみもと・えいじ）

①S46年10月18日②21才③H4年④3試合⑤182cm⑥77kg⑦右⑧日本体育大学⑨神奈川県⑩日体荏原高校⑪トミ

▽寸評＝スピードとテクニックを兼ね備えた期待のプレーヤー。ディフェンス面でも、運動量も多く、アクティブさが特長。課題は、確実性。

▼抱負＝ナショナルチーム入りして1年になりますが、まだまだとまどうところや未熟な点が多いですけれど、チームの役に立てるよう努力したいと思います。そして、全日本チームのアジア選手権優勝と、オリンピック出場、入賞と大きな目標と夢を実現出来るように全力で頑張りたいと思います。

●広政宜孝（ひろまさ・よしたか）

①S48年7月6日②19才③H5年④5試合⑤178cm⑥68kg⑦左⑧筑波大学⑨山口県⑩下松工業高校⑪ひろまちゃ

▽寸評＝全日本チームの最年少プレーヤー。シュート力、フェイント力、配給力とセンスのよいプレーが期待されている。何と言っても前向きの姿勢が非常によい。

▼抱負＝自分がナショナルプレーヤーに選ばれたのは、やる気をかってもらえたからだと思います。他の先輩方のプレーを見て、自分のものにしようと思います。自分は身長が低いので、今以上にスピード・パワーをアップしていかないといけないと思います。相手は日本じゃなく世界各国なので、今までの甘い考えではいけないと思います。とにかく自分は、ナショナルプレーヤーとして恥ずかしくなく、胸を張って歩けるような選手になりたいです。

ナショナルB選手

GK荒木　進
GK坪根敏宏
GK日原一幸
CP福村正巳
CP笠　哲也
CP小河原洋行
CP小野　優
CP藤井孝志
CP森岡健二
CP日原正和
CP木浪達文
CP市原剛次
CP満井健康
CP辻　昇一
CP笹浪重俊

全日本女子チームの遠征合宿同行記

団長　竹野　奉昭

思い出の国・チェコ

私は全日本女子チームに同行し、2年振りにチェコ及びスロバキアの二か国を訪問した。チェコスロバキアは、今年1月1日に二つの共和国に分離独立したばかりだが、日本チームにとっては忘れられない国である。

1961年の西ドイツで開催された第4回男子世界選手権の途中に、この国を訪れ強化合宿をした。そして1964年、チェコスロバキアで開催された第5回男子世界選手権・予選D組でノルウェーを18対14で破って日本が世界の檜舞台で初勝利をあげた地である。

私にとっても対ソ連戦の前半に右目上を裂傷（五針縫う）して救急車で病院に運ばれ、後半から出場して予選D組の得点王に選ばれた。

また、今回の全日本女子チームをお世話頂いたムラシューさんには、数年前に技術指導を受けるなど、日本とチェコスロバキアの関係は親密を増した。私の所属する大崎電気工業もこの国との交流を深め、同国の男女両チームがたびたび来日している。チェコスロバキアは数多くの思い出の国である。数十年にわたり共同体として栄えたチェコスロバキアが、今後の多くの難問をかかえていることには間違いない。チェコとスロバキアの平和と繁栄を祈念したい。

バスで４００km走る

3月18日12時30分、成田発のKLM八六二便でアムステルダムに向かった。現地時間16時45分（時差8時間）に到着。同地で一泊し、翌19日9時30分、アムステルダム発のKLM九四五便でプラハに向かった。同11時15分プラハ空港に到着。プラハ空港にはムラシューさんはじめ連盟のスタッフが出迎えてくれた。昼食後、バスでプラハを離れ、４００km離れたスロバキア共和国の首都ブラチスラパを経由し、ザルタナに着いた。ザルタナはドナウ川を境にハンガリー、オーストリアの国境にある小さな町である。

一昨年全日本チームが滞在したとか。体育館に宿泊施設があり、食事は三食とも近くのレストランを利用した。ハンドボールをする条件に恵まれたところである。19日から24日まで5泊6日の滞在で、試合は6試合とハードなプログラムであり、成績は1勝5敗と振るわなかった。24日にバスで移動し、チェコ共和国のプラハから50km離れたニインブルグの町に移った。

ここのスポーツセンターは、環境に恵まれ、すべてのスポーツ競技ができる立派な施設があり、チェコスロバキアが世界に誇る幾多の名選手を生み出したところでもある。日本女子チームは4月5日まで滞在したが、私は社用のためチームと別れ、28日にプラハをたち、アムステルダムを経由して29日に帰国した。

意見統一が必要

今回の全日本女子チームの選手は、新旧半々のチームで18才から23才の若い層で編成されました。日本リーグの入替戦のあと日立栃木に集合し、3泊4日の短い合宿を終えてこの遠征に来ているので、私はチームワークを心配していました。

しかし、"案ずるより生むが易すし"の諺どおり、生活・練習は若さを全面に出した活気あふれるチームであった。半面、試合においては、チームをまとめるリーダー不足を感じた。

若い選手たちはのみ込みも早いし、なかなかよい素質を持っている。ジュニアとシニアが混合でこのような合宿および遠征をすることで、お互いを理解し、日本女子全体のレベル・アップにつながり大変よいことである。磨きをかければ韓国・中国を追い抜くことは十分に可能である。

今年8月の女子アジア選手権、女子ジュニア世界選手権、そして来年10月の広島のアジア大会での活躍も期待したい。また全日本のチームは、各チームから選ばれた日本を代表する選手たちである。各チームにはそれぞれ監督・コーチがおり指導を受けてるわけで、技術指導の違いを感じているところがある。

これは私の意見であるが、国内の試合と国際試合とでは試合の内容・技術が違うと思う。選手強化については監督・コーチに一任するのではなく、全日本女子チームの進むべく技術・戦術等を強化・指導委員会で話合い、意見を統一し、全日本チームを預かる監督・コーチに指導をお願いして行くことが重要ではないだろうか。

合宿中にサマータイム

27日夜、ムラシュー夫妻と通訳のクララ女史と一緒に食事し、IHF、EHF、今後のチェコ協会の問題等について語り合った。突然、ムラシュ夫人が「あす3月28日からサマータイムよ。時計を1時間進めてください」と言う。私は思わず「チェコだけですか？」「ノー、EC全部」。すました表情。まったくヨーロッパ的である。監督や選手たちはサマータイムを知っているのだろうか。遅れてチームに合流する伊藤コーチは、アムステルダムに宿泊しているが、それを知っているだろうか。私は心配になってきた。

ムラシューさんは「あす私が連絡するよ」と、のんびりしている。1時間早くなるということは、毎朝6時に起床し、食事前にランニングをしている緒方監督は、28日から午前5時起床となる。またヨーロッパの生活に慣れてきた選手たちも、リズムが狂ってしまうのではないかと多少気になりだした。サマータイムの言葉も知らない選手たちには、初体験であり、これまた尊い経験になったと思う。

最後になりましたが、ムラシューさんはじめチョコとスロバキア連盟の皆さんに、そしてこの遠征計画にご協力を頂いた水上前全日本女子コーチに厚くお礼を申しあげます。

女子ナショナル遠征報告

ジュニア選手の成長と忍耐・自覚の大収穫

監督　緒方　嗣雄

　今回の遠征は、大会出場及びその調整などが対象で無く、遠征合宿（トレーニングを主として）の試みである。ナショナルメンバーの中の故障者を除き、その代りとしてジュニアのメンバーを7名加え、オリンピック予選を目指したチーム編成である。国内スケジュールの関係で、チーム作りをする間もなく出発した。

　現地のスケジュールは、前回、91年欧州遠征でお世話頂いたチェコ・元IHF理事のムラツ氏にお願いした。こちらの考え方にほぼ近い計画である。またGKトレーニングを（チェコ・ナショナルGKコーチ）、シュート練習及び戦術指導をムラツ氏に依頼した。

　3月19日、チェコ・プラハ入り。早速、ムラツ氏の出向えを受け、昼食後約6時間をかけて500キロ、バスにてスロバキアのヅラタナ（ハンガリー、オーストリアの近く。前回行った町）へ移動。最近まで一国でありながら、選挙によりチェコとスロバキアの二つの国となり、国境ができたためお互いのパスポートコントロールがあり、約1時間を費やす。宿舎は、体育館のすぐ横になっており、今回の目的通りの環境である。

　20日は遠征第一戦。オーストリアのヒポ銀行と4か月振りの対戦（戦績は後記）。何もチームプレーができず、一方的なゲームであり、ただスピードプレーに感心させられた。

　21日（日）は、ズラタナカップと称してヒポ銀行、イメジックス・トポリンク（チェコスロバキアの現在3位チーム）、地元ズラタナ（チェコスロバキアの二部リーグ所属）、日本の4チームでリーグ戦が組まれた。1日3試合とハードではあるが、メンバー全員でいろいろな事を試す事ができた。イメジックスには1点差負け、ヒポ銀行には防御を重点に置いて昨日より16点も失点を少なくする事ができた。ズラタナ戦は快勝であった。この大会では要所要所で選手を変え、全選手が体験することができた。また、この全日本チームが何をすれば良いかの方行づけをすることができた非常に参考になる大会であった。今大会第3位となり、ガラスカップは、大会を通じてコンスタントにゴールを守った川島選手にプレゼント（今回より大会の記念品はその試合で一番の活躍選手に渡す）された。

　ムラツ氏の説明によると、国は二分したが、92年度のリーグ戦は従来通り93年より各国で行なわれる。ノルウェーの世界選手権はチェコスロバキアの一国で出場する様である。

　22日は、オーストラリア・ジュニアとの戦い。全日本はベテラン選手の頑張りでなんとか勝つ事ができたが、退場者続出で、ディフェンスの悪さを暴露した。

　23日は、ブラチスラバにてスロバキア・ナショナルと対戦。最悪の出足であり、誰となく乗らない選抜チームの特徴そのものであり、ファイティングスピリットも欠けてしまった。

　五日間のズラタナのスケジュールを消化し、プラハニーンブルグスポーツセンターに移動。前回は不評であった食事も改善され、何不自由なくトレーニングに励む事ができた。特にこれまでの6試合での欠点を修正した。速攻のパターン、ディフェンスの低い体勢からのアタックと方向付け、ノーマークシュートの確率を上げる事、この三点の修正に重点的に取り組んだ。また、チェコナショナルGKトレーニングと、ムラツ氏によるシュート練習、GKトレーニング及びボール展開の戦術についてのトレーニングは、単調な中味ではあったが選手も全力を出し切り、バテた様であった。

　遠征の楽しみは、練習休みで、ショッピングである。午前中は近くの町のカットグラス店に出かけ

たが、二人の店員に20名が殺到し、日本語と日本円でテンヤワンヤの買物であった。午後はプラハ市内へ行き、思い思いのグループで、先生、先輩、同僚にお土産を買い、休日を満喫した。

13日間のニーンブルグ滞在期間中4試合の親善試合を行った。チェコナショナル2試合共に白熱した大接戦を演じ、2敗したが、力は互角であると思う。スラビアプラハ(リーグ現在3位)とはナショナルが抜けていた事もあるが楽勝であった。スラビアプラハ男子ジュニア戦は、思い切り良くぶつかり、気迫のこもった試合運びがあり、練習の成果の現われた試合であった。

4月5日、再度バスにて移動。8時間程かかり、ドイツ、フランクフルトの北約50キロにあるマインツラーへ。4月6日はマインツラーチームとの試合が行われた。ここにもチェコ及びルーマニアからの助っ人がおり、前半は苦戦したが、後半に入り、速攻が良いタイミングで出る様になり勝利を手にした。4月7日、再度バスでオランダへ移動したが、5時間費した。ホテルで休養後、オランダリーグ1位のエビックシフトとの試合。ナショナルを5名、ハンガリーより3名の助っ人が揃っていた。特にサイドプレーヤーは世界選手権でも対戦したスピードのある選手で、警戒したにもかかわらず、サイドと速攻で一人に9得点を許す。前半は一方的に押され7対19、後半に入り自分たちのリズムを取り戻し、追い上げる事ができた。この試合で初めて日本人の応援団が来て、観客席から声援を送って頂いた。

日本人会デュセルドルフ支部の5~6家族の方々であった。心強い初めての味方の声援が、後半の追い上げに力添えしたと確信している。

4月8日、再度バスにて3時間ほどかかって最終試合地のオランダ東北部アレンへム市へ。この地でオランダリーグ2位のゲルデランドチームと対戦。オランダ・ナショナルチーム監督のチームで、ジュニア選手5名がおり、テクニックは感じなかったがスピードのあるチームであった。全日本も最後の試合ということで気力を出し切り、終始リードを保って試合を進め、遠征最終戦を勝利する事が出来た。

遠征期間中、2日間の試合見学及び休養以外は1日2回のトレーニング、13試合(5勝8敗)、バス移動2500キロの旅を体験し、大きな収穫を得た。ジュニア選手の成長と自信を得た事、どの様な境遇にも打ち勝ってベストに近い状態で試合ができる忍耐、何ものにも勝るナショナル選手としての自覚が生れた確信を得たことが大きな収穫であった。

今後の強化方針としては、この大きな収穫を基に今回の遠征メンバーを中心に、世界B大会参加者より2名~3名、ケガではずれていた3名を加えた構成で特に防御から速攻のスピードあるチームに、またフォア・ザ・チームを前面に押し出し、チーム作りをして行く所存です。

最後になりましたが、この遠征にご協力を頂きました方々に衷心より御礼申し上げます。今後共益々のナショナル活動に御理解、御協力を頂きますようお願い致します。

試合結果

日付		得点	前半/後半	得点	対戦相手
3月20日	日本	22	10—19 / 12—20	39	ヒポバンク(オーストリア)
21日	日本	25	10—16 / 15—10	26	イメジック・ポトリング(チェコスロバキアリーグ現在3位)
	日本	24	11—12 / 13—7	19	ズラタナ(チェコスロバキア2部リーグ)
	日本	12	5—13 / 7—10	23	ヒポバンク

＊2日間に渡って行われた「ズラタナカップ」の結果は、1位ヒポバンク、2位ポトリング、3位日本、4位ズラタナだった。

日付		得点	前半/後半	得点	対戦相手
22日	日本	29	18—13 / 11—11	24	オーストリアジュニア
23日	日本	14	3—16 / 11—16	32	スロバキアナショナル
26日	日本	25	12—16 / 13—15	31	スラビアプラハ男子ジュニア
29日	日本	25	10—12 / 15—15	27	チェコナショナル
30日	日本	21	8—16 / 13—10	26	チェコナショナル
4月1日	日本	24	10—7 / 14—11	18	スラビアプラハ(チェコスロバキアリーグ現在3位)
6日	日本	26	10—10 / 16—12	22	マインツラー(ドイツリーグ5位)
7日	日本	19	7—19 / 12—9	28	エビックシノフス(オランダリーグ1位)
8日	日本	26	12—11 / 14—11	22	ゲルデランド(オランダリーグ2位)

＊遠征通算成績5勝8敗

女子ナショナル・ヨーロッパ遠征日記

3月18日㈭　伊佐野実保

　私にとってのヨーロッパ遠征が始まりました。日本を12時30分のフライトでヨーロッパへ向かい、11時間もの時間を機内で過ごしたにもかかわらず、到着した現地時間は午後4時半で、私にとって3月18日はとても長い長い一日でした。
　目的地に着き、周りを見渡せば外人で、出発前に外人は大きいと聞かされていて大きいと頭の中では分かっていても、実際に自分の目で見ると、思っていた以上に大きく感じました。こんな大きな人たちを相手にすると思うと不安を感じる反面、本場ヨーロッパの人たちはどんなプレーをするのか興味がわいてきました。
　街の中は高い建物が多く、道に沿ってずっと続いていて、空港からホテルまでの道のりは、よく映画に出て来そうな雰囲気で窓にくぎづけでした。東京駅のモデルになったと言われる駅の前を通りましたが、お城みたいな建物で、照明もたくさんついていてヨーロッパらしいモダンな駅でした。
　夕食はゆっくり時間をかけて楽しむというヨーロッパ独特の生活習慣を感じました。
　これから長いヨーロッパ遠征なので、早くヨーロッパの雰囲気に慣れ、一つでも自分のプラスになる多くの経験をしていきたいです。

3月19日㈮　松下由紀子

　今日は、一日中かかっての大移動だった。飛行機を降りてからは、ただひたすらバスに乗っての移動だった。
　途中に2回の検問があった。初めてだったから、思わず窓から見入ってしまった。気が付くと外はもう真っ暗で、今日は何だか食べてばかりだったなぁとバスから降りて上を見ると、ものすごくきれいな空だった。本当にたくさんの星だった。自分のいる所ではめったに見る事ができない。まるでプラネタリウムにいるとは大げさだけど、それに近いくらいの星空だった。こんなのを吸い込まれそうな空というのかなぁと思いながら、星座を探してみたけれど、オリオン座ぐらいしか分からなかった。
　出発前に日本でもオリオン座を見たけれど、今ここでも見ていると本当にやっぱり地球は一つだなっていうか、つながっているなぁと、とても不思議な感じがした。
　宿舎に着いてからは、短い時間だったけれど全員で汗を流した。明日からは、ゲームも始まる。チームを組んで間もないし、どれだけできるかわからないけれど、一人一人が持っている力を出せるように頑張っていこう。

3月20日㈯　荒川　裕子

　3月20日、対ヒポバンク戦です。西洋人と戦うのは初めての私にとって、相手がどんなに大きいのか、どれくらいのパワーがあるのか、頭の中で想像はしていたものの実際ゲームをしてみるとスピード、パワー、高さすべてが想像以上でした。チーム全員が170cmを優に超える長身の人ばかりで、まずその高さに圧倒されてしまいました。
　日本では通用するパスも、簡単に投げたのではすぐにカットされてしまうし、ディフェンスでは押さえようと思ってつかみに行くと、逆に腕を巻かれてしまって即警告、退場となってしまいます。スタッフからの指示で相手を突いて動きを止めて守るようにと言われたのですが、必ずしもそれがうまくいかず44失点という大量得点を相手に許してしまいました。簡単なパス・キャッチミスが多く、それをすべて相手に逆速攻されたのも大量失点の原因の一つだと思います。自分自身、ポストでボールをもらって〝よしシュートだ〟と思っても、フリースローになってしまうケースが多くありました。
　西洋人とゲームをする時は、日本人相手にゲームをしている自分の二倍も三倍ものパワーと早い判断力、スピードが必要なんだとつくづく感じました。試合は負けましたが、西洋人とゲームができたことがすごくうれしかったし、自分にとってプラスとなりました。まだまだ合宿は始まったばかりです。残りの試合で少しでも上手くなって日本に帰れるように、一試合一試合全力で戦っていきたいと思います。

3月21日㈰　谷本　泉

　ヒポバンク、地元のチームなど、4チームが集まっての大会が行われた。
　一日で3ゲームをこなすハードスケジュールだったが、1ゲーム1ゲームに目的意識を持って臨んだ。一つは、相手は体格のよいプレーヤーなので、ディフェンスで当たり負けない。また、相手以上にボールへの執念を持つ。攻撃では、練習してきているパターンの実践、そこからの応用。
　一試合目は、自分たちの凡ミスからの相手の逆速攻をやられすぎていた。迷ったプレーからのミスが一つの原因であり、もっと積極

的にボールを持っている人もいない人も動いていき、最後のシュートにつなげていきたい。

二、三試合目は、ミスも少なくなり、自分たちのリズムがとりやすかった。

ディフェンスでよくやられていたのは、クロスからの強引なシュートや、クロスからのポスト。自分たちは、待ってディフェンスしていても、上からポストにタイミングを遅らせてパスさせることができないので、相手にプレッシャーを与えるようなディフェンスをしていかなければならない。

欧米人は、自分たちの守りに対して、つかまったら倒れて、警告、退場を誘ってきた。3ゲームでかなりの警告、退場だった。

今日は4人で守るケースが2回もあった。6人でしっかり守れるためにも、フットワークをよくし、さらに攻撃の読みをトレーニングしていきたい。

3月22日(月)　川島ゆう子

朝、目覚めた瞬間、体中がいつもより痛いのを感じた。海外遠征に出発して5日目。今日までに5試合を行って来ました。同じ人間ではありますが、体格、重量、高さ、パワー、試合での当たり方が違うので、体中皆アザだらけ。外人相手となると疲労も違ってきます。

午前中、自分たちでトレーニング。午後の試合に合わせて、その日その場でいろいろな対策を練っていく。昨日までの試合は速攻には走っているけれど、そこへパスが出ていないため、得点に結びついていない。ノーマークシュートは確実に決める。これを徹底して練習を行った。

今日の相手はオーストリアのジュニアチーム。最初からとばしていけという指示どおり、積極的にシュートを狙っていて、ディフェンスでも粘って速攻までもっていき、得点に結びつけていけた。練習してきたノーマークシュートを大切なところで、キーパーの一番手足の出しやすいところへ打っていたので、もっと全員が意識して直していかなくてはいけない。若いメンバーが出た時にディフェンスで弱いところが出たり、粘りきれていなかった。

最後に、今日は大切なミスをおかしてしまい、全員の気のゆるみ？があった。個々がもっとしっかりしていかなくてはいけない。

3月23日(火)　松本　恵美

遠征に来て5日目が過ぎた。今日はスロバキアと試合をし、32－14だった。前半、自分たちのペースがつかめず、キャッチミス、パスミスと、ミスの連続になってしまい、速攻で持って行かれ、日本はなかなかシュートまで持って行くことが出来ず、点にまで結べなかった。ミスをしてしまったのに戻りが遅く、ボールを見てしまうケースが多かった。午前中に戻りの練習をしたのだが、やっぱりボールをいつまでも見てしまう事があったので、それが試合にも出たのだと思った。

後半は、少しずつペースがつかめて来て、速攻で点が取れるようになった。しかし、DF面で退場者が多く、5人で守ったり4人で守る事がこの試合の中でたくさんあった。腰が高過ぎてしまって、手で守りに行っているので警告になってしまっていると思った。DFをもっと強化して行った方がいいと思った。

今日の試合でアップする時から皆元気がなかったので、アップの時から試合は始まっているのだから盛り上げて試合に臨めるようにして行かなくてはいけないと思った。

試合の後で竹野さんに、自分たちは闘争心と集中力に欠けていると言われ、私もそうだと思った。これから先も試合があるので、今日見たいな試合をやらないよう臨んで行こうと思った。

3月24日(水)　西村　聖子

ズラタナでの一週間の合宿を終え、今日はニインブルクへと移動しました。その道中は見渡す限り緑、木、土。これだけの広大な自然があれば〝ゴルフ場を作ろうと思えば、いくつ作れるだろうか〟と、バスの窓越しに見えた風景から、日本人の私はそんなことを考えてしまいました。

これまで、ヨーロッパの生活習慣には慣れたものの、ハンドボールに関しては、6試合を終えた今でも、まだまだ不十分です。ヨーロッパのプレーヤーのスピード、パワー、テクニック、どれをとっても目を見張るものばかりで、そんなプレーヤーに対して、体の小さい日本人が闘うためには様々な工夫が必要です。

しかし、今までの試合では、自分たちの出来ることを徹底してする前にミスを連続し、大量失点をして、ゲームの主導権をはやくから相手に持たれたままで苦しいゲーム展開をすることが多かったように思います。

今日の練習から、これまでの試合の反省をふまえての一からやり直しということで、フットワークを中心としたディフェンス練習をしました。

今回の遠征の試合では、勝敗にこだわりを持つことはもちろん、内容を重視するということなので、自分たちが今出来ることは何か、何が欠けているのかを把握して、ヨーロッパを相手にする時どうするべきかを、残された遠征期間の中で、頭で理解して、体で覚えたいと思います。

3月25日(木)　山川　由加

今日は、ヨーロッパに来て始めての休みでした。午前中はフリーで、ゆっくりとくつろぎ、今までの練習の疲れをとりました。

午後は、4月1日に対戦が予定されているスラビアプラハが出ているリーグ戦を観戦しました。そのゲーム前に街を歩く時間がありました。その街は、なにもかも大きく見え、ヨーロッパだと感じました。

もっと時間をかけて、ゆっくりヨーロッパの街をみたかったです。電車かバスかわからない乗り物にはびっくりしました。一度は乗ってみたいです。

試合ではいろんなことを感じました。今日みたところは、今度戦うことになっているので特によくみました。感想としては、あまり強くないと思いました。互格のスピード同士のチームが戦っていたので、そう見えたかもしれません。ゲームは戦ってみないとわかりませんが、試合の時は、今日の試合をみたことを生かしていきたいです。今日のチームもミスがたくさんありました。やっぱり一つのミスは大きいと思いました。一つ一つ大切にやっていくことを忘れてはいけません。

明日はJrの男子とゲームです。とにかくミスをなくして、アップから元気に声を出していきたいです。とくに若い自分たちがやるべきことは、チームを盛り上げることだと思うので、常にそう心掛けます。

3月26日(金)　古澤さとこ

今日、午前の練習が始まる前に、監督から「ゲームをしに来てるんじゃなくて、練習中心で、その成果をゲームで使える様にしに来てるんだから」と言われました。午後からはスロバキア男子のジュニアとゲームをすることになっていたので、午前中の練習は、DF中心でした。ゲームは5時30分からで、アップは4時からでした。パス、シュート、6対6で、どうやったら守れるのかがゲームのポイントでした。男子は身長、力、スピードがあり、勢いをつかせたらおしまい。だから、とにかく早めにつぶす事でした。DFは、すごく良く守っていたと思います。攻撃では、大きい壁の間から、ロング、ステップシュートなどが決まりました。

このゲームの残り10分間ぐらい出させていただいたのですが、入ってすぐに逆速攻があり、もう一発勝負しかない状態だったので思いっきりいったら、右手にあたって、止めてしまいました。自分でも「あたった！」としか考えられませんでした。その後も何本かシュートはありましたが、すごいスピードボールが体をよぎっていくと思えるようでした。

ゲームは25対31と負けましたが、よくDFで守れていたし、男子との試合ではできたのだから、女子と戦う時も同じDFができるように、との監督の言葉でした。この遠征で、いろんな相手とゲームをするのだから、一つ一つ上手になれるように、がんばりたいと思います。

3月27日(土)　田中美音子

今回、初めてナショナルの遠征に参加して、ジュニアの時とは違った緊張の中での練習の毎日です。それに、フェイント、シュート、スピード、DFも、今まで通りにやっていたら全然通用しないことがよくわかりました。

この遠征にナショナルのメンバーとして連れてきてもらって、とてもよい勉強になっていると思います。ゲームにも出させてもらって、日本ではなく外国の人との初めてのゲームで、外国には日本人の中にはいないスピード、技術などを持っている人がたくさんいることを知りました。そういう人に一歩でも近づけるように、せっかくこの合宿に連れてきてもらっているのだから、しっかりがんばって身につけていきたいです。

それと今回の遠征で、今日も外人相手を想定した徹底したDFのフットワーク練習をしました。今やっているフットワークはすぐに身につくわけではないですが、この遠征中ずっと続けて常にそのフットワークが生かせるようにして、最後の試合でどれだけ身についたかを試してみたいです。

3月28日(日)　貴田　直子

今日でチェコに来て5日目になるが、皆かなり疲れもたまってきている様だ。そんな時は、集中力が欠けてしまう事が多いため、一人一人が課題を作って、それに取り組んでいく事にした。

チームとしては、課題の一つであるDFに重点を置いて練習している。フットワークも速さだけではなく、DFで腰が高くならない様にしっかり膝を曲げ、腰を落とした姿勢を保つ様に徹底した。まだ何日間もしていないが、4対4、6対6のDF練習では、少しずつ成果が出ている様だ。こういう事は、今回の遠征だけではなく、しっかり継続していきたいと思う。

これまでのゲームの中でも、DFが出来ていない時は、自分たちのペースがつかめず、攻撃でもミスが続く事が多い。速攻もつなぎが悪くなるから、セットオフェンスしかなくなり、そこでもパターンをくずされ、逆速攻で押される、という悪循環。

やはり、前半の出だしで、どれだけDFで頑張れるかでゲームを自分たちのペースで出来るかが決まると思う。

これからも、また何試合かするが、今までのミスは繰り返さずに、また、成功したパターン、コンビなどは、徹底して使っていく様にし、チームとしても、個人としても、この遠征で何かを必ずつかんでいこうと思う。

3月29日(月)　広瀬喜代香

今日のチェコスロバキア戦は、前回2点差で勝っているチームとあって、お互い国をあげた大切な試合でした。

練習の時、何本も合わせたプレーが決まったり、速攻も全員でシュートまで持っていきシュート確率の高い試合だったと思います。

良いプレーは、一本で終わらせるのではなく何本も使っていくべきだと思いました。今日の試合は、フォーメーションプレーがきれいに決まっていました。

DF面においても、高い位置で守れていました。今回も退場者が出てしまいましたが、日本では考えられないようなプレーで取られていました。ここが日本と外国の違いだと感じました。逆に日本もあのように何もしていないDFに対して、すぐに倒れ、相手を退場にまでもっていくようなプレーを外国の大きなDFに対してもっていくと、攻める範囲も広くなると思います。

新メンバーになって、まだあまり合わせていないチームでしたが、一つになっていたと思います。自分も今日の試合を見ながらたくさん勉強することができ、人一倍努力して、このような試合に早く出れるように頑張ります。

今日は、試合前にチェコグラスの工場見学をしました。吹くだけでガラスが広がり、いろんな形になります。とてもきれいでした。

3月30日(火)　比嘉　晴美

チェコへ来て11日目。皆チェコでの生活もだいぶ慣れてきたみたいで、食べ物や飲み物も各自工夫して楽しんでいます。

特にこのスポーツセンターは、周りが自然でいっぱい。ベランダでヨーグルトを冷やしていたら小鳥に食べられた子がいたり、それをきっかけに小鳥のエサづけをしながら観察している子もいます。

今回の遠征の目的は、試合ではなく合宿なので、毎日ハードな練習をしながら試合をしていく訳ですから、皆あちこち筋肉痛です。

試合の方では、このスポーツセンターへ来てからは3試合をこなし、2試合はチェコスロバキアナ

ショナルと行い、2つ共黒星。しかし新生ナショナルにしては、すごくいい試合をしていると思います。今日の試合のスコアは、26―21と5点差をつけられて負けましたが、前半の8点差を後半3点差まで詰め寄るところまで力をつけてきました。

　まだまだ前半の立ち上がりの弱さ、ミスの多さなど、チームの若さのための弱いところが出てきますが、練習で悪いところをなおし、コンビを合わせ良いところを伸ばしながら、この遠征中に一つでも成果を上げられる様に頑張っていきたいと思います。

3月31日(水)　山尾　陽子

　チェコのオリンピックセンターに24日に来てから8日が過ぎ、こちらでの生活にもだんだん慣れてきました。つい最近まで雪が降っていて寒い日が続いていましたが、ようやく春らしい暖かさが感じられるようになってきました。食事はパンとバターとハムが多く、三食の中では昼食のメニューが豊富で、日本との違いを感じました。

　今日は特別に、ムラツさんに技術的な部分を教えてもらいました。ムラツさんは、技術面を専門にされていて、ソウルオリンピックの強化チームを教えていたそうです。初めにパスワークの練習をしました。簡単な練習だったのですが、ボールに対してとても集中力を必要としました。次にシュート練習に入り、クロス、フェイント等応用練習をしました。特にシュートについてムラツさんは、早く打つことを求められました。日本人は外人よりも比較的身長が低いため、相手が驚くようなシュートを打ちなさいと言われ、ジャンピングキャッチからのロングシュートを練習しました。

　何試合かしてきましたが、どのチームも高さとパワーがありました。世界の壁は厚いけれど、日本独特のスピードとコンビプレー等を練習すれば、世界に通用すると思います。今回、ムラツさんに教えていただいた事を自分たちのプレーの幅を広げるために役立てたいと思います。

4月1日(木)　上出恵美子

　今日は、スラビアプラハというチームとの試合だった。

　このスラビアプラハというチームの試合を一度観戦していたから、試合もやりやすかったと思った。観戦した時の感想と言えば、「こんなもんでいいのか」と思ったくらい迫力がないというか、観客だけが異様に盛り上がっていた感じだった。

　いざ試合が始まると、すごく大きい選手たちばかりだった。身長、体格すべて大きい。だからパワーも違うと思った。いくら相手がそんな選手ばかりだからといって、自分を弱いと思うのは良くないから、相手がどこの誰でも思い切って試合に臨んだ自分だった。練習したことを試合でやる、失敗してもやってみて、それが成功すれば大きな自信になっていくのだと思った。

　私はこの遠征に参加できて、本当にうれしく思ってる。初めは不安でしようがなかったが、これはすごくいい体験であり、自分自身が成長したような気がした。

　このようなチャンスは、生かすべきものであると思った。

4月2日(金)　西口　貴子

　今日はお休み。待ちに待ったショッピングの一日となりました。

　朝、いつもどうり7時45分から散歩、体操を終え、8時から朝食。パンを食べながら、交わす会話も今日は休みとあってか、いつもよりはずんで見えました。

　9時に出発。午前中の行き先は、こちらで有名なカットグラスのお店。日本で手に入れると大変高価な物だそうで、グラスや花びん、灰皿など、とてもきれいなカットのほどこされた作品が、所狭しと並んでいました。チームメイトのおみやげや家族、恩師へなどなど、買う目的も様々で、近い将来(!?)を見込んで自分にという人も…。一度に20人くらいのお客さんの応対に一番苦労したのが店員さんだったと思います。次から次へと日本語で話しかけられ、パニック状態にあったに違いありません。おかげでスムーズに買い物ができず、集合時間に遅れてしまう結果に。とても、あわただしい午前中となりました。

　午後はプラハの街でのショッピングでした。こちらでの買い物は2度目とあって、2時間半程のフリータイムをみんな有意義にすごしました。

　練習・ゲームの一日と違って、楽しい一日が過ぎるのは早いもので、あっと言う間の一日でしたが、遠征も残り8日。がんばって、無事日本へ帰りたいと思います。

4月3日(土)　田中　里美

　プラハのスポーツセンターに来て10日が過ぎました。こちらの生活にも随分慣れ、体調を悪くする人もなく、毎日が充実してきました。最近、日中温かく過ごしやすい一日が続いているので、ベランダに置いたヨーグルトを小鳥が食べにやってきます。日本はもう桜が満開だと聞きました。私たちが日本に帰る日まで、まだ散らずに残っていればなぁと思う今日この頃です。

　プラハでの生活も残り2日となった朝、監督が「今日と明日の2日間、気合いを入れていくぞ。」と言われ、自分たちの練習に対しての取り組む姿勢を考えなければならないと思いました。いざ練習に入ってみると、パス、キャッチなど消極的なミスが多く目立ち、基本的な事を徹底してできませんでした。ナショナルチームだからこそ、精神面でカバーし、ミスを続けないようにして切り換えていかなければならないと思います。ノーマークシュート一つにしても、全部同じタイミングで打つのではなく、キーパーの逆をついたコースを体で覚えていきたいと思います。練習の最後の段階で盛り上げの声が少なくなります。つらい時こそ全員で声を出し、一日の練習をよい型で終らせたいと思います。そして「盛り上げる」と言う事は「自分から声を出す」と言う事だと思います。

　残り三戦、今までやってきた事を全部出せる様、全員で力を合わせて頑張りたいと思います。

4月4日(日)　貴田　直子

　この遠征も中盤にさしかかり、チェコでの合宿も最終日となった。

　初めは緊張の中での練習で、皆遠慮しがちだったが、日が経つにつれ、良い意味でも悪い意味でも慣れてきて、今日は練習最終日という事もあって、その悪い面が出ない様に全員が緊張感を持って練

習に取り組んだ。
今回の遠征のメンバーの中では、私は年齢的にも上になり、自分自身が要求される事をしっかりやらなければいけないし、自分自身の事だけではなく、チーム全体の事も考える必要があった。
私は攻撃の要であるフローターで、しかもエースポジションという大きな役割を任されている。しかし、まだまだその役割を果たし切れる時が少なく、戸惑う事が幾度かあった。これまではシュート確率が低いし、徹底出来ていなかった。
このチェコでの合宿では、どんなプレーが通用するか、自分から積極的に取り組んだ。
この後、ドイツ、オランダへと向かい、練習ゲームが行われるが、どれだけ自分のやってきた事が通用するか試してみたい。
今回の遠征も残りわずかとなり、自分も含めチームにとって重要なものとなると思うし、悔いのない様にしていきたい。

4月5日(月)　谷本　泉

今日はチェコからドイツ入りの日となり、朝からスカイケースの荷作りなどで慌ただしいスタートになった。12日間のチェコでの生活は、トレーニング中心でその成果を試すという形でゲームが組まれた。まだ100%の出来ではないが、速攻、攻撃、守備の面で、この新しいチームの土台となる型は出来上がってきた。あとは徹底してやることと、成攻率を高くすることだと思う。
ここまでで、いろんな試合を体験してきた。立ち上がりの悪さで前半3対16という試合や、チェコナショナルと2点差で離されそうになっても、詰め寄っていく精神的な強さのみられた試合。一つ一つの試合の良かったところ、悪かった所を忘れないでいたい。次につなげていくためにも……。
今回のメンバーの半分がジュニアだったが、この遠征で全日本のことを少しでもつかめただろうか。ヨーロッパの人のプレーを含め、審判のジャッジの違いも感じたと思う。
ドイツの目的地までの道のりはとても長くて、11時間もかかった。車内から外を眺めると、チェコの風景とはやはり違った。建物もしっかりしていて、色彩的にもきれいで、チェコとは違う豊かさを感じた。

4月6日(火)　松本　恵美

合宿も残り5日となり、試合も3試合だけになりました。移動して試合なので、練習という練習がもう出来ません。今日も午前中、5時間という長い時間移動をし、午後、試合をやりました。相手は、マインツラーチームと戦い、26対22で勝ち試合でした。
前半からスピードで行き、点を取っていきました。DFも守るのですが、あと一歩の所でやられてしまいました。しかし、点差はあまりあかず、1点1点追い上げ、逆に自分たちが差をつけていきました。
後半は、前半とまた違い、DFも守れ、守って速攻の形が何本も決まりました。セットに入っても、今まで練習して来た事が出来たと思いました。
DFの時に、守っているのだから、最後まで守っていけるようにしていきたいと思いました。
残り2試合、今まで練習で得た事を全部だせるよう臨んで行きたいと思いました。
相手は、自分たちより大きい選手なので、守りにしても攻めにしても、しっかりやって行こうと思います。2試合とも勝つ気で行きたいです。

4月7日(水)　西口　貴子

今日は、ドイツからオランダへ移動の日でした。朝、いつもどうりに体操した後、朝食。9時にホテルを出て、約4時間程で到着。ホテルは『ゴールデン・チューリップ』といって、いかにもオランダらしい名のホテルでした。部屋に入ると、とてもかわいく、テレビ、電話、冷蔵庫等々、何でも備わっていて、一日しか宿泊できないのが残念でしようがなく思えてなりませんでした。
その後、昼食をとってゲームに出発までの時間を、フリーで過ごしました。
ゲームは7時半からでした。デュッセルドルフに住んでいらっしゃる日本人クラブの方が応援して下さる中、ゲームは行われ、前半7対19とリードを奪われて大差で終えました。相手のEVIC(エビック・シイフト)(リーグ1位)というチームにはハンガリーの選手も入っていて、スピード、パワー、高さが有り、特に右サイドのハンガリーの選手には前半だけで9点も取られてしまいました。
後半は点を気にせず、ぶつかっていったのが良かったのか、12−9とリードしてゲームを終えました。しかし、前半の点差が大きすぎて、トータルでは19対28の9点差で負けてしまう事に…。
今日のゲームは元気が持続できず、自分たちのペースでできなかったので、明日の残る1試合では、3週間の合宿の成果が全て出しきれる悔いの残らないゲームにしたいと思いました。

4月8日(木)　上出恵美子

今朝、少し早く起きて仲間と一緒に散歩をした。まず馬を見に行こうと、カメラを片手に馬の方へ向かった。馬にえさをあげたり、馬と共に写真を撮った。次に別な馬の所を散歩をしに行った。一頭の馬が走っていた。向こうの方へ走っていって、こっちに戻って来る時にどこをどう走って来るのかと思って見ていたら、突然、私たちの方へ突進してきて、すごくびっくりした。日本で、馬をこんな真近で見れるのは動物園ぐらいだから、自然な馬を触った感じだった。
ところで、この欧州遠征は今日の試合が最終だった。今日対戦したチームは、ゲルデランド(リーグ2位)だった。結果は、勝ったけど、このチームも大きい選手がいた。大きい選手にスピードをつけさせると、こっちが不利になる。守りではこっちからも攻撃的な守りをしたり、相手にスピードをつけさせないようにけんせいするなど、いろいろと考えなければならない。相手の特徴などもすぐに見つけたりすることも必要になるでしょう。
この遠征で練習・試合で学んだことを、自分のチームへ帰っても本当に無駄にしてほしくないと思う。絶対自分にプラスになるものばかりだから、この遠征で学んだ事を忘れないでほしい。

'93男子世界選手権大会視察報告

指導委員会
笹倉清則／村松　誠

１９９３年３月９日から20日間、スウェーデンの４都市を中心として第13回男子ハンドボール世界選手権大会が開催された。今回は、私（笹倉清則）と村松誠氏が指導委員会から派遣され、大会の視察にあたった。当初の予定では、予選リーグはグループＤ（ロシア、韓国、フランス、ドイツ）という話題のチームの集中したグループに絞って視察し、準決勝リーグはＡ、Ｂグループの試合に絞って、最後にストックホルムで決勝まで観戦することにしていた。しかし、大会前にユーゴの参加辞退があり急遽、Ｄグループからフランスが外れ、そこにデンマークが入ることになった。この組み合わせの変更が最終的に今大会の順位に大きく影響することとなった。また、今大会ではバルセロナで我々を驚かせたフランスの勢い、そして変則的な防御の勢いと今回の組み合わせの変更という一つの「運」といったものをフランスに感じざるを得なかった。

技術・戦術的には以下に記述するような特徴が観られた。

【攻撃】

1、個人技術

サイドプレーヤー……サイドプレーヤーのシュートテクニックは今大会においては、大変向上している。バックスピン、狭い角度からの飛び込むテクニック、色々なタイミングからのシュートバリエーションが観られた。特に速攻のシュート時には多彩なテクニックを駆使して確実に得点に結び付けていた。また、遅攻ではセンター、もしくは45度からの少しのズレを利用してスピードで抜き、エリア内で角度を広げてシュートを決める場面が多く観られた。まだ、統計的には分析していないが、かなりサイドシュートの得点の度合いが前回の大会を上回ってるように思える。

ポストプレーヤー……ポストプレーヤーは、これまでの大会と同様な傾向にあり、大型選手で防御との競り合いの中で得点をしていた。しかし、全体的に前回からの傾向と同様、消極的な低い防御が主流となっているためにポストプレーヤーのサイド・フロントブロックという役割が前回より若干明確になってきているように思われた。

ロングシューター……今大会の最優秀選手に選ばれたスウェーデンのMAGUNAS ANDERSSON（180㎝）、バルセロナの決勝でも活躍したロシアのTALANT DU-JSHEBAEV（188㎝）らに代表されるように、２ｍ選手が多くみられる中で比較的小柄な選手が、そのシュートテクニックで形態的なハンデを十分に補い、そしてそれ以上にトッププレーヤーとして認められる活躍をした。彼らのシュートテクニックは防御の隙をついてアンダーハンドからのシュート、位置を変えながらのランニングシュートでのミドル、両足フェイントのタイミングから防御の肩口や、頭の上からのステップシュート、空中で変化しながらのシュートと多彩である。

防御戦術が向上し、簡単にはシュートチャンスを作り出せなくなってきている今日、彼らのような動きの質、並びにシュートテクニックを持ったロングシューターが今後ますます必要とされるように思われる。

2、戦術

戦術面では、特に大きな変化は観られなかった。これまでの傾向同様に色々なポジションからの走り込みを利用した２－４への移行攻撃と、ロングシューターのクロスによる位置の変化からの攻撃、また韓国のようなポジション攻撃によるものに分類できる。

全体的に、どのチームも消極的で低い位置で防御するために、攻撃の主はロングもしくはミドルと限定され、ポストプレーは十分に生かせない。そのためにセンターもしくは45度からの少しのズレを生かして、サイドのスピードを利用し、シュートへ結び付ける攻撃が多く観られた。コート中央からのわずかなズレを、最大限に生かそうとするものである。従って、サイドの位置取りはコーナー近くとなり、そこからボールをもらう際にシュート角度を広げるように走り込むプレーが大変多かった。また、その際のパスはほとんどと言っていいほどバウンドパスであった。

これは、ソウルオリンピックでスウェーデンがソ連の変則防御に対して成功したものであり、既に一般化したものと思われる。また、このバウンドパスは、45度からサイドだけではなくセンターからサイド、極端なときには防御の隙を利用し、逆の45度からサイドへのパスの際にも観られた。

3、速攻

速攻は既に全てのチームの一つの戦術として考えられ、トレーニングされてきている。しかし、やはり今回の上位チームと下位チームでは、スピード、パスワーク等にまだ差があると思われる。この差が順位にも影響しているように思われる。

4、その他

ゴールキーパーをフィールドプレーヤーと交代し、攻撃に７名のフィールドプレーヤーを入れ攻撃する場面が幾度か観られた。試合終了間際、そのような場面が起こりそうになったら、交代選手はベンチでユニフォームの上にゼッケンをつけて待機する場面もあった。しかし、直後それにより得点となった場面は、少なくとも観戦した試合の中では残念ながら観られなかった。今年より、国内ルールに採用される。

【防御】

防御は、前回の大会からの傾向同様に、どのチームもフリースローラインからエリアラインの間を守るという傾向にあった。０：６防御が主流であり、いくつかのチームは１：５防御形態をとっていた。その中で、韓国の高い１：２：３防御や、エジプトの自軍コー

〔次頁へ続く〕

日韓社会人女子ハンドボール交流大会
関東地区で5試合が行われる

第21回を迎える日韓交流は、去る3月24日より4月3日まで11日間にわたり関東地区に於いて行い、日立栃木・JUKI・日本ビクター・大崎電気・シャトレーゼがそれぞれ対戦した。試合は韓国選抜チームの個人技とパワフルなプレーに対して、日本チームがどこまで実力を発揮出来るか注目された。結果は韓国選抜チームの5勝全勝であったが、日立が3点差、シャトレーゼが2点差と善戦した。

■3月25日／日立栃木体育館

韓　国33（14－12／19－18）30日立栃木

試合開始早々、日立栃木は蒋のシュートで先制したが、韓国は朴美貞を中心とするスピーディなボール展開と出足の良い速攻で、10分には逆に4点リードする。日立も飯塚のパワーあふれるロングシュートなどで応戦、24分には同点に追いついたが、日立にミスが出て、韓国が2点リードで前半を折り返した。後半、日立は陳が速攻から得点し同点とし後、一進一退の攻防が続き大接戦となり会場をわかせた。残り5分、韓国は粘りをみせ連続得点し初戦を白星で飾った。

■3月27日／JUKI体育館

韓　国37（13－10／24－7）17ＪＵＫＩ

試合は韓国のペースで始まり、10分には5対1と差がついた。しかし、JUKIは韓国のミスからの速攻で山口が得点したのをキッカケに、5分間で4得点するなどしてゲームを盛りあげた。韓国も着々と点を入れるが、JUKIは永尾、林実がロングシュートを決め前半を10対13で善戦する。後半はJUKIが調子をくずし、韓国に7連続得点を許した。韓国は速攻・ポストプレー・ロングシュートと多彩な展開で点差をひろげた。JUKIは後半、チーム全体が若さと経験不足から立ち直れず、前半の健闘が惜しまれるゲームであった。

■3月29日／岩井市総合体育館

韓　国41（22－8／19－9）17日本ビクター

岩井市の協力により、岩井市教育委員長はじめ中学生・高校生・日本ビクター社員など、多くの観客が観客席をいっぱいにした中で、試合が行われた。

韓国は若手主体のチーム構成であったが、個人プレーの正確さと、技術の能力に優れ、選抜チームを組んで3日間だけの練習を生かしていないチームとは思えない動きであった。日本ビクターは、ロングシュートやコンビプレーで得点をあげるがミスが多く、そのミスを相手の得点に結びつけられてしまった。韓国は個人プレーや2人または3人のコンビプレーで簡単に得点を取り、大差のゲームになった。日本ビクターの選手は、この試合を通して韓国選手から正確なプレー、スピード、個人能力など多くを肌で感じ学んだことだろう。今後のご活躍を期待したい。

■3月31日／大崎電気体育館

韓　国38（18－15／20－13）28大崎電気

韓国チームを迎え、体育館は小学生・中学生・高校生や応援の大崎電気社員でコートの周囲を埋めつくした。試合はどちらも点を取れば取り返す、という白熱した展開で始まり、会場の観客を大歓声で沸かせた。韓国の選手は、ジャンプ、フェイント、フットワーク等の基本ができており、そのうえハンドボールを知っていて、これが強いチームを作っているのだろう。試合は28－38であったが、この交流試合で肌で感じ、刺激を受け、大変良い勉強になったことを、今後の試合に生かし大きく前進することだろう。

■4月2日／シャトレーゼ体育館

韓　国29（19－15／10－12）27シャトレーゼ

前半の立上り7分では7対2でシャトレーゼが5点リードしたが、朴美貞を中心とした韓国の攻撃に着々と点を重ねられ、18分には11対11の同点となった。その後は一進一退の攻防が続いたが、残り10分から韓国は連続6点し、19対15と4点リードで前半を終了した。後半に入り、シャトレーゼは小松の強気なロングシュートで喰いついていったが、李尚恩の豪快なロングシュートや、姜賢周の鋭いプレーで点差を広げた。後半26分で29対23の6点差となったが、シャトレーゼは最後の最後まで粘りに粘った。小松、山岸のロングシュートが続々と相手ゴールに突きささり、連続4得点をあげ今一歩逆転に及ばなかったがシャトレーゼがよく善戦した試合であった。

＊　＊　＊

今回の対戦成績は韓国の5戦全勝で終ったが、日立栃木・シャトレーゼが大健闘し、日本ビクターは岩井市の協力があり、各会場には多数の観客（ハンドボールファン）が観戦に来て大いに盛りあがった大会になった。

末文になりましたが今回の日韓交流大会に御協力・御支援・御指導いただいた各関係の方々に心から厚く御礼申し上げます。

〔前頁より続く〕

トでのマンツーマン防御などが観られたが、これは形態的に劣っているチームにのみ観られ、全体的には、エリアライン付近を防御しポストでプレーさせないような防御に対する考え方が観られた。当然、どのチームも一つの防御形態だけでなく変化はもっており、状況に応じて使い分けていた。

また、数的優位な状況（6：5）の時の相手エースへのマンツーマン防御は、ほとんどのチームに観られた。この数的優位な状況での防御とすて、大変興味がもたれたのはチェコの防御で、これは1：2：3防御隊形で、ボールのないほうのサイドをノーマークにして、そこへボールがいかないように、プレス・ディフェンスをするものである。

【まとめ】

全体的に観て、戦術的には攻撃よりも防御のほうが勝っていたという印象があった。しかし、攻撃での個人の技術と速攻に関しては技術の高度化が観られた。

最後に、ゲームとは直接関係はないがチェコが分裂し、チェコ・スロバキアとして最後の試合終了の際、観客全員が立って拍手で見守ったことに対して、やはり同じヨーロッパでの変化への関心の高いことをあらためて感じざるを得なかった。

第12回アジア競技大会
広島1994

ハンドボール競技に
男女14チームが参加予定

アジア大会担当常務理事　山下　泉

第12回のアジア大会1994の開催まであと1年5か月と迫り、大会のメイン会場となる広島広域公園陸上競技場をはじめ、施設は相次いで完成しています。また、数多くの選手団を受け入れる新広島空港、観客の輸送の一翼を担う新交通システムなども着々と工事が進められています。

ここで広島大会の概要をご紹介させて頂きますと、1994年10月2日(日)から16日(日)までの15日間、広島市を中心とする県内各地で開催されます。実施されるのは34競技、237種目と芸術展示です。また選手役員数は約7300人を見込んでおり、昭和39年の東京オリンピックに匹敵する規模で、日本史上最大の国際的な総合スポーツ大会となります。広島で開催する意義として挙げられるのは、①国際平和都市への貢献②スポーツ振興③都市基盤の整備、以上三点です。原爆被災という人類史上例を見ない惨過を体験した広島市は、都市像として「国際平和文化都市」を揚げ、恒久平和の実現を訴え続けています。アジアの若人がスポーツを通じて交流し、相互理解を深めることは世界平和に貢献するもので、大変有意義な大会です。広島大会はスローガンの通り「ASIAN HARMONY」を高らかに奏でることと思います。

資金的にも最大であり、都市基盤整備の事業費は約1兆5千億円、運営費は25[illegible]億円を見込んでいます。参加国の増加や競技数、参加選手の増加等相当膨れるものと思います。現在時点で約50億円の資金不足と発表され、ここでもバブル経済の破綻の影響をもろに受けております。一昨年実施されたアジアハンドもまだバブルの余韻が残っており、多額の資金を調達出来、無事大会を成功裡に終了することが出来、安堵しております。

アジアオリンピック評議会（OCA）の会長は創立以来クウェートのシェイク・ファハド・アル・サバ氏が務めてきましたが湾岸戦争で戦死され、子息のシェイク・アーマド氏が後任の会長に選ばれました。アジアハンドボール連盟（AHF）の会長はシェイク・ファハド氏が務めていました。広島アジア大会の誘致に多大の貢献をされたと荒川前副会長より聞いております。

ハンドボール競技の予想される参加国は男子9チーム＝日本、韓国、北朝鮮、中国、バーレーン、クウェート、イラン、サウジアラビア、アラブ首長国連邦、女子5チーム＝日本、韓国、北朝鮮、中国、中華台湾の計14チームです。

一チーム選手16名、役員4名の計20名。エントリーの締切日は、1994年5月5日迄に広島アジア競技大会組織委員会（HAGOC）に必着となっている。会場は広島市東区スポーツセンターです。運営面についてはアジア選手権大会の経験を生かし、日本協会・広島県協会が一体となり、スムーズな運営を心掛けたいと思っています。

日本チームのアジア大会での必勝を願っております。先日、全日本男子の蒲生晴生監督が広島で「アトランタ五輪の前に広島アジア競技大会がある。ぜひ金メダルを取りたい」と発表されましたが、とにかく勝つことがハンドの発展につながることになります。

アジア競技大会はオリンピックの人気には及ばないにしても、決して広島でのローカル大会ではありません。閣議了解により立候補、開会式では元首が開会を宣言致します。そして競技数、参加選手、役員数など、規模においても国家的な記念事業であり、広く国民のご理解、ご協力がなくては成功致しません。一層のご支援をお願い致します。

アジア大会の行われる広島広域公園全景

陸上競技などが行われるメインスタジアム

右はハンドボール会場。左は屋内プール

ハンドボールのマスコットキャラクター

第18回日本リーグ展望

男子は湧永と日新の争い必至!?

広報委員会　鬼田　健一

★女子

女子は、オムロンを北国銀行、シャトレーゼ、二部より昇格した日立栃木の3チームが追従すると思われるが、特にオムロンのディフェンスには、各チームとも苦戦が予想される。オムロンは、昨シーズン最終戦で北国銀行を振切り、優勝したパワーと安定感が他を一歩リードしている。抜群のディフェンスに加え、速攻、長身の張(183cm)を中心とした攻撃は昨シーズンと変わらない。張の大きな体を生かしたディフェンスはチェックが厳しく、他チームの選手にとって脅威になっている。また、即戦力新人に西村(武庫川女子大)・高橋(殖産銀行)を迎え補強面でも充実している。また今シーズン限りで引退が予想される比嘉の華麗なプレーに注目があつまる。

北国銀行は、昨シーズン限りで4名引退したが、新旧交代もスムーズに進み、今年もオムロンを追従する筆頭になりそう。攻守の要松田は、谷本や成長著しい上出をリードし、絶妙なパスワークをすると思えば、自らシュートを決めるなど、北国銀行のコントロールタワー的存在で期待があつまる。ポイントゲッター金の抜けたあとには、韓国光州市庁より白をむかえるなど、得点力での対策は問題ない。気になるのがディフェンス力で、総失点が多いことや、昨シーズンの警告・退場数(フェアプレーポイント)が6チーム中最多と課題も多く、先の対オムロンとの最終決戦では、後半かさんでいた警告が退場につながり、その間に加点され逆転負けでリーグ初制覇を逃している。

シャトレーゼは、昨シーズンディフェンスを課題に戦ってきた結果、過去最高の3位と上位定着を目指す。GK村山は、全日本合宿でのシュートから各選手の動きをおぼえ、それがリーグでの活躍となっている。各チームの中心選手は、全日本合宿で一緒に練習しているため、GK村山を苦手とする選手が多い。これより上位をねらうには、小松の長身(179cm)を生かしきったプレーが続けば、オムロンを脅かす存在となりそう。またペナルティスペシャリスト小俣には、元日本ビクター長田の記録(年間PT43点)更新を期待する。

日立栃木は、陳、蒋が2年目で一段の活躍が予想される。よくオムロンの張と比較されるが今年は、一部復帰で二度の対戦があり注目される。全日本のアタッカーと期待されている貴田(174cm)がシャトレーゼ小松同様、ロングシュートを連打できれば上位進出へとつながる。

また日立栃木のポイントゲッター新井、チームの要市来が一部でパワーとテクニックのプレーを見せてくれそう。

上昇中のブラザーは、学生界出身の日比野、田島、西が社会人2年目で、特に昨シーズン前半けがで出遅れた分、日比野、西は燃えている。毎試合ウイングの田島、甲斐で10点、フローターの日比野、西がミドルで10点以上得点することができれば一部定着も期待できる。

二部の大崎電気は、韓国ナショナル選手を迎え、今年は一部復帰を目指す。先のバルセロナオリンピック・ゴールドメダリストの朴正林は、厚待遇で迎えられ、その期待度も相当なものになっている。

★男子

男子は、今年も最終的には東京体育館で、プレーオフが行われるが、そこに上がっていくと思われるのは、湧永製薬、日新製鋼。その他は、一線上で並ぶ。

湧永製薬は、抜群のディフェンス力で、昨シーズンチャンピオンに返り咲いた。個人得点では、ランキングベスト10に堀田がただ一人いるだけだがチーム総得点で、

他をリードした。今シーズンも総合力で勝るので、プレーオフに必ず上がってくるだろう。玉村、酒巻、堀田のベテランはけがでもない限り昨シーズン同程度の活躍はできる。エース中山は多少むらがあったが、今年はコンスタントに得点を重ね、日本のエースとしてランキングトップに上がって欲しいところ。

　日新製鋼は昨シーズン最後にきてもたつき、悲願のリーグ制覇を湧永製薬にさらわれ、今シーズンに対する熱気を感じる。昨シーズン後引退かとさわがれた西山は監督兼任として初のリーグ制覇に挑む。あと5点と迫った通算最多新記録（612点）は、6月5日鈴鹿の本田戦か、6月12日金沢での大崎戦あたりに達成できそう。他のメンバーは昨シーズンと変わりなく、湧永製薬とトップを競う存在になりそう。リーグトップになるには、ディフェンス力を養うにつきることで、女子の北国銀行に類似する。得点力では湧永製薬を勝り、レギュラー全員に得点力があり、今シーズンこそ西山新監督でリーグ制覇に期待が大きい。

今年は悲願のリーグ制覇なるか、日新製鋼

総合力で勝る湧永製薬は連覇か!?

　本田技研は、立木新監督、内藤新コーチに代りだいぶ選手も入れ代わった。レギュラー陣の引退により、学生界から即戦力として満井（中大）、谷村（大阪経大）、井上（順天堂大）、日原（名城大）ら185cmクラスをそろえた。この新人たちがディフェンスと速攻の足を使ったスピードハンドボールを早く習得し、レギュラーとして活躍できるかに掛かっており、苦戦を強いられそう。

　大同特殊鋼は、昨シーズン湧永製薬、日新製鋼に一勝もすることができず低迷した。韓国ナショナルチームの合宿参加で出場できなかったエース林、ポイントゲッター末岡には、他チームからのマークがきつくなるなど、リーグ前半の不調が最後まで尾を引いた。今シーズンは、高村新監督兼任での出直しスタートとなる。

　大崎電気は宮下が引退しただけで、昨シーズンとメンバーは変わらない。甲斐、魚住の中堅選手に対する期待は大きいが、それに続く若手の成長が今ひとつで、プレーオフまで上がるのはやや苦しいところ。

　中村荷役は、昨シーズン後半見事な追い上げをみせた。青森の日新製鋼戦と呉の湧永製薬戦では、横綱相撲をみせた。その勢いを今シーズン中維持できれば、ホーム東京体育館でのプレーオフが期待できる。

　今シーズンの注目は何といっても三陽商会である。大型ルーキー岩本（早大200cm）が入り話題独占になりそう。キャプテン田中、左腕渡辺、ポスト小河原ら全日本メンバーに岩本が加わり、他チームからのマークがきつくなる。昨シーズンは、試合前半リードして後半逆転負けするパターンがよく見られたが、岩本効果でリードを保てるか。そしてプレーオフ出場に期待をつなぐことができるか。三陽戦観戦に足をはこぶ回数が増えそうである。

選手の入れ替わった本田技研に注目

小学生ハンドボールの現状と普及対策の検討課題

日本ハンドボール協会普及担当
小西　博喜

■はじめに

京都国体後、第1回目のスタートをした全国小学生大会も本年は第6回が開催されるまでに至ったが、全国47都道府県中26府県の参加チームでは、まだまだマイナースポーツの域から脱していない発展途上の実感がある。しかし、現状のままでは、全国大会とはいっても年々わずかな増加しかみられず、極めて厳しい社会体育環境に置かれている状況である。今回は第5回大会参加チームのアンケート調査結果から参加チームの現状を分析し、普及活動の積極的な拡大を図る意味でその問題点を模索し、基礎資料として報告する。

一、スポーツ少年団育成に関する問題点

現状の学校教育の中では課外活動としてのクラブ活動として位置づけられているが、年間を通してのハンドボールチーム編成は困難である。それは学童野球、ミニバレー、少年サッカー等に所属しているクラブ員が多く、ハンドボール部員として固定化することは極めて難かしい。さらに地域ごとにはスポーツ少年団があり、夏は野球、冬はサッカー、ハンドボールという形で、シーズン制に分けて課外活動として行っている。

しかし一方、地域スポーツのハンドボール指導者が余りにも少なく、かりに指導者がいたとしても果してハンドボール指導者を引き受けて貰えるか否か、地域における協力体制の組織配置図が十分整備されていない悩みもある。つまり、その指導者はボランティア活動という広域のワクの中で善意に好意的な形の依存範囲に留まっており、限られた活動制限の中で指導している状況である。その現場では実際面のハンドボール技術指導が出来る経験者の絶対数が不足しており、大きな普及ブレーキとなっている。また子どもたち自身も少年サッカー、学童野球に比べてハンドボール競技そのものが、イメージとしてマイナースポーツの類に置かれていることから、あえてハンドボールを希望する子どもも集団が出来にくいというのが実情であろう。

このようにハンドボールクラブの位置づけが社会体育とも学校体育ともいえない現状では、直ちにハンドボール少年団として発展する可能性の条件がいささか不十分な感じがする。何はともあれ指導者のあらゆる事情によって、今後この地域におけるハンドボールクラブが継続して活動出来るかどうか、常に検討の余地が残されている状態である。しかし、一例をあげると、甲田ハンドボール部（広島）は湧永製薬ハンドボールチームの持導を受けているが、これはまさに社会体育的意義を十分充足した支援体制であり、理想的なモデルケースといえる。このように、かりに実業団チームの所在する地域でハンドボール少年団チーム育成に協力が得られるならば、社会的貢献度はさることながら子どもたちにとって、もっと身近な〝親しめるハンドボールの魅力〟を発見することができよう。

また一方、サッカーはスポーツ少年団への登録を義務づけており、各都道府県体協に登録していないチームは、全国大会の参加資格がないという規制をしてサッカースポーツ少年団の育成をはかっている例もある。

また今後、小学校児童数が減少するため、国体ハンドボール開催府県地域において、地域ぐるみのハンドボールスポーツ少年団育成活動が、香川県ハンドボールスポーツ少年団のように誕生すれば、これもまた素晴らしい育成事業である。これらの発展の糸口は指導者に依存する面が多く、教員の場合には転勤があるため、中には折角のチームが自然消滅に追い込まれてしまうこともある。現在、全国的に各種のブロック大会が開催されているが、経済的な面で全国大会出場までは派遣員の負担が難かしいという事情もあり、マイナースポーツの実態を痛感する。そのため、少なくともこの全国大会は、全都道府県参加が図れるような対策を検討する時期であり、経済的支援体制の協賛する冠スポンサー、さまざまな協賛形式で関心を集めなければならない課題をかかえている。

二、小学生ハンドボール指導上の問題点

(1) 指導者への悩み

全国的にみてハンドボール指導者数はメジャー数には及ばないが、特に小学校ハンドボール経験者の教諭が少ないのが最大の悩みのタネである。また、女子指導者の教諭が少ないのも、健康管理面での実際指導が効率的にできない理由となっている。

一方、転勤後の後任探しで依頼をしても仲々協力が得られず、チームが立ち消えになってしまう例もある。素人指導者でも十分にルールや基本的な指導内容の理解がないとハンドボールに対する関心も薄くなり、指導者自身の興味を欠き、魅力を失ってしまう。ここにも協会自体の大きな悩みが存在する。

(2) 練習場所・練習回数・時間等の悩み

小学校のグラウンドには、サッカーゴール、バスケットゴールは置かれているが、ハンドボールゴールポストは仲々見当らない。各指導者はコートの借用、ゴールポストの購入、コート作り等、まず週・月間計画作成に大きなエネルギーを費やしている。したがって、各都道府県協会組織をベースにした普及事業に対する認識を理解を得て、協会組織で機能した協力がないと行きづまりは早い。

学校ハンドボールクラブでは、学校施設を利用した週1～2回程度の頻度が多く、ルールをマスターしたり、シュートフォームの形成等、多くの時間を要するが、子どもたちは他競技とカケ持ちのため、日曜日は特に試合が重複し、最終的には親の意見で他の競技に流れてしまうケースが多い。

三、小学生ハンドボールの要望課題

(1) 小から中へのバトンタッチ

小学校でハンドボールに興味を示した子どもたちは、進学する中学校にハンドボールクラブがないため、他種目に転向しなければならないミスマッチが生じている。このような一貫性指導の不備な点を社会体育領域のカテゴリーでハンドボールスポーツ少年団育成は各都道府県協会に課せられた急務であり、競技力向上へつなぐ大事なカケ橋である。ことに(財)日本中体連ハンドボール部が平成5年度から日本協会の加盟が承認されたことから、連動する普及事業として小学生育成事業は重点施策となってきた。したがって、小学生チームの所属する近隣中学校スポーツ関係指導者との情報交換はもとより、相互間のポリシィにかかわる理解が求められ、広域スポーツ組織のコンセンサスを得て協力支援体制を小・中・地域ハンドボール指導者の間で打ち出し、地方協会機関と柔軟的な対策を講じてほしい。

(2) まず"資金づくり"の模索

ハンドボールスポーツ少年団育成のために、全国大会派遣活動経費に関する経済的支援体制の協賛企業スポンサーについての検討、民間の地域ぐるみ、地方協会との人材の再生産が構築できるよう、各都道府県協会理事長を中心に各行政、民間機関とのタイアップしたアプローチを如何にコンタクトすればよいのか、その調整が小さくても多くの"スポーツ組織努力"を結集するエネルギーの生産は欠かすことができない資源であり、JOCジュニアオリンピックカップ大会との一貫した普及対策事業として一石を投じる課題といえよう。

(3) ハンドボールスポーツ少年団加盟のすすめ

さて、本大会は全都道府県協会参加を目指しているが、大会の性格上、現時点では学校体育から社会体育事業に発展させる必要性があり、本調査によってもスポーツ少年団大会に参加の意義を求めている傾向がみえることは注目したい。また現在、その過渡期にあることも理解できる。なお、小学校体育の教育課程の中にハンドボール教材を取り入れる努力と併せて、各都道府県協会にハンドボールスポーツ少年団の誕生が頂点強化を目指す普及強化方針は本事業の主要なテーマでもある。

さらに各都道府県体協へ加盟登録をして、初めて正式な発足とみたい。

(4) 成果と今後の課題

スポーツは今、質的な変化が求められている。「マスコミが記事を書き、テレビの画面になる頻度が増えて、視聴率がよければ人気は出てくる」そのために企業、スポーツ組織両者と親密な関係を持ち、人気が出てくれば、企業はそのスポーツに便乗することは間違いない。その意味で普及推進活動は、小学生版の簡易ルールブックやトレーニングブックなど、ミニハンドボール用の手引書も必要だし、指導者研修、講習会も開催し、多面性柔軟性のある指導者づくりの必要性を感ずる。

現在、ボールの規格変更を検討し、つかみ易い安全性の高いボールの大きさ、固さ等を考慮した高学年用、低学年用ボールを試作中であり、本年度の大会時には展示する予定。また第7回大会時から使用球として採用を予定されている。このことを含めて、ハンドボールスポーツ少年団育成に活気的なインパクトを与え、全国ハンドボール指導者の総力を結集し、マスコミを動かし、ハンドボールスポーツ少年団誕生からJOCジュニアオリンピックカップ育成に続く活性化は、サバイバルの支援体制としてまさしく選手強化の競技力向上に連動するであろうし、目前に控えたアジア・世界につなぐ子どもたちのために、そのエネルギーが今要求されているのではなかろうか。

小学生ハンドボールチームに関する調査

都道府県名	男	女	混合	スポ少	体協	計
北海道	0	0	0	0	0	0
青森県	0	0	0	0	0	0
岩手県	1	1	0	0	0	2
宮城県	0	0	0	0	0	0
秋田県	0	0	0	0	0	0
山形県				4	4	7
福島県	0	0	9	8	7	9
茨城県	2	1	0	3	0	3
栃木県	0	0	3	0	0	3
群馬県	1	2	0	0	0	3
埼玉県	0	0	3	3	3	4
千葉県	1	2	0	3	1	3
東京都	1	0	0	0	0	1
神奈川県	0	0	0	0	0	0
山梨県	0	0	1	1	0	1
新潟県	0	0	0	0	0	0
長野県	1	1	1	2	0	3
富山県	0	0	0	0	0	0
石川県	0	0	1	1	0	1
福井県	3	2	0	0	0	5
静岡県	0	0	0	0	0	0
愛知県	11	3	4			18
三重県	1	0	2	0	0	3
岐阜県	1	1	0	2	0	2
滋賀県	0	0	0	0	0	0
京都府	11	7	1	2	0	19
大阪府	0	0	0	0	0	0
兵庫県	0	0	1	0	0	1
奈良県	0	0	0	0	0	0
和歌山県	0	0	1	0	1	1
鳥取県	0	0	0	0	0	0
島根県	0	0	0	0	0	0
岡山県	0	0	0	0	0	0
広島県	0	0	1	0	1	1
山口県	0	0	0	0	0	0
香川県	4	4	0	2	2	8
徳島県	0	0	0	0	0	0
愛媛県	0	0	0	0	0	0
高知県	0	0	0	0	0	0
福岡県	0	0	0	0	0	0
佐賀県	2	1	0	0	3	3
長崎県	3	2	0	0	5	5
熊本県	0	0	0	0	0	0
大分県	3	9	0	12	12	12
宮崎県	0	0	3	1	3	3
鹿児島県	0	0	0	0	0	0
沖縄県	0	0	0	0	0	0
総合計	46	37	31	44	42	121

(平成4年12月実施)

各地の大会結果

関東

千葉県高校新人大会
（1月15〜17日／佐原市民体育館他）

〈男子〉

▼1回戦
土気 14−8 木更津
国府台 12−10 渋谷幕張
専大松戸 7−6 市川西
柏陵 13−12 船橋東

▼2回戦
市川 30−5 土気
東邦 18−8 学館浦安
拓大紅陵 26−8 沼南高柳
八千代 10−7 国府台
柏南 13−8 専大松戸
流山中央 29−20 泉
東京学館 9−6 小金
二松沼南 28−6 柏陵

▼3回戦
市川 17−11 東邦
八千代 21−13 拓大紅陵
流山中央 13−12 柏南
二松沼南 20−5 東京学館

▼準決勝
市川 22−10 八千代
二松沼南 36−9 流山中央

▼決勝
二松沼南 19 {9−6, 10−9} 15 市川

〈女子〉

▼1回戦
昭和学院 28−0 専大松戸
若葉看護 12−5 柏
佐原 17−10 泉
生浜 14−12 和洋
若松 5−2 柏陵
東葛飾 19−3 市川西
明徳 19−4 市立松戸
東邦 22−0 聖徳

▼2回戦
昭和学院 20−5 若葉看護
生浜 11−9 佐原
東葛飾 13−8 若松
東邦 20−10 明徳

▼準決勝
昭和学院 28−2 生浜
東邦 24−10 東葛飾

▼決勝
昭和学院 17 {8−6, 9−6} 12 東邦

東海

愛知県高校新人大会
（1月15・17・24日／名古屋市体育館他）

〈男子〉

▼1回戦
犬山南 15−14 豊川工
名南工 23−11 半田東
蒲郡東 19−16 岡崎西
岡崎東 24−19 新川
愛知 25−9 三河
半田 23−11 春日井東
五条 21−16 春日井
一宮北 16−9 松蔭

▼2回戦
東海 24−4 犬山南
佐織工 25−15 名南工
中京 23−19 蒲郡東
桜台 30−11 岡崎東
愛知 17−16 旭丘
刈谷北 17−17 3PTC2 半田
桜丘 16−10 五条
岡崎城西 17−9 一宮北

▼3回戦
東海 21−20 佐織工
桜台 23−9 中京
愛知 28−10 刈谷北
岡崎城西 24−8 桜丘

▼決勝リーグ
東海 16−10 桜台
愛知 19−11 岡崎城西
桜台 13−9 岡崎城西
愛知 21−8 東海
桜台 24−16 愛知
東海 17−17 岡崎城西

〔順位〕①愛知②桜台③東海④岡崎城西

〈女子〉

▼1回戦
春日井 21−19 武豊
岡崎西 14−6 春日井南
緑丘商 13−10 豊橋南
一宮女 25−14 横須賀
安城学園 29−4 蒲郡東
岡崎 14−5 木曽川
中京女 11−11 2PTC1 豊田南
半田 20−13 豊橋商

▼2回戦
名短付 40−7 春日井
岡崎西 14−13 愛知商
松蔭 29−3 緑丘商
東海女 23−12 一宮女
三好 14−11 安城学園
富田 18−13 岡崎
中京女 19−6 蟹江
佐屋 16−12 半田

▼3回戦
名短付 42−5 岡崎西
東海女 21−13 松蔭
三好 14−9 富田
佐屋 13−10 中京女

▼決勝リーグ
名短付 28−10 東海女
三好 19−9 佐屋
東海女 14−8 佐屋
名短付 20−12 三好
東海女 12−9 三好
名短付 33−6 佐屋

〔順位〕①名短付②東海女③三好④佐屋

三重県中学生新人大会
（1月24・31日／四日市霞ケ浦体育館他）

〈男子〉

大安 14－8 西笹川
白子 12－11 笹川
東員第二 7－3 四日市南
亀山 12－0 三雲
名張北 11－4 常磐
天栄 15－3 菰野

▼2回戦
西朝明 23－10 大安
朝明 32－7 亀山
白子 8－4 名張北
天栄 14－10 東員第二

▼準決勝
西朝明 16－7 白子
朝明 25－8 天栄

▼決勝
朝明 14（7－4、7－7）11 西朝明

〈女子〉

▼1回戦
大木 4－3 菰野
阿山 11－1 大安
天栄 13－3 柘植

▼2回戦
朝明 14－1 大木
桔梗ケ丘 6－3 東員第二
笹川 7－4 阿山
北勢 13－1 名張北
西朝明 16－2 赤目
天栄 7－1 四日市南
白子 17－5 名張
亀山 11－10 西笹川

▼3回戦
朝明 10－6 西朝明
笹川 9－4 白子
天栄 13－6 桔梗ケ丘
北勢 13－7 亀山

▼準決勝
天栄 20－4 朝明
北勢 11－7 笹川

▼決勝
朝明 11（6－3、5－5）8 北勢

三重県高校新人大会

（1月10・15・17日／霞ケ浦体育館他）

〈男子〉

▼1回戦
四日市南 17－11 尾鷲
津西 12－10 津東
川越 17－15 四日市西
高田 28－26 海星
四日市 23－10 津

▼2回戦
亀山 22－9 四日市南
上野 22－19 桑名西
桑名工 23－12 津西
桑名 17－5 桑名北
津工 23－6 朝明
高田 22－14 四日市中央工
四日市 22－10 上野工
四日市工 36－5 川越

▼3回戦
亀山 33－5 津工
桑名工 22－6 四日市
高田 21－14 上野
四日市工 24－6 桑名

▼準決勝
亀山 棄権 高田
四日市工 20－7 桑名工

▼決勝
四日市工 22（10－7、12－5）12 亀山

〈女子〉

▼1回戦
名張西 12－8 四日市
桑名 14－6 桑名西
四日市西 12－0 川越
四日市商 12－0 尾鷲
上野 12－11 四日市南
津東 32－0 津
四日市四郷 15－8 松阪女子

▼2回戦
暁 33－2 名張西
津東 17－7 四日市西
上野 18－10 桑名
四日市商 23－9 四日市四郷

▼準決勝
暁 32－3 上野
四日市商 22－7 津東

▼3位決定戦
津東 18－9 上野

▼決勝
暁 21（13－2、8－3）5 四日市商

九州

鹿児島県高校選抜大会

（1月16・17日／国分市総合体育館他）

〈男子〉

▼決勝リーグ
鹿児島工 33－18 大島
出水 16－8 鶴丸
鹿児島工 20－11 出水
鶴丸 18－17 大島
出水 12－9 大島
鹿児島工 16－7 鶴丸

（順位）①鹿児島工業②出水③鶴丸④大島

〈女子〉

▼決勝リーグ
鹿児島南 20－5 奄美
大島 10－6 国分実業
鹿児島南 15－6 鹿児島純心
大島 15－13 奄美
鹿児島純心 13－10 国分実業
鹿児島純心 8－5 奄美
鹿児島南 14－8 大島
国分実業 11－8 奄美
大島 14－8 鹿児島純心
鹿児島南 17－7 国分実業

（順位）①鹿児島南②大島③鹿児島純心

鹿児島県中学校新人大会

（1月9・10日／鹿児島アリーナ）

〈男子〉

▼準決勝
国分 15－9 東谷山
重富 15－9 伊敷

▼決勝
重富 21（11－2、10－4）6 国分

〈女子〉

▼準決勝
鹿大附属 13－8 重富
伊敷 24－7 国分

▼決勝
鹿大附属 12（6－6、6－4）10 伊敷

■4月度常務理事会

4月10日（土）　於：日体協会議室　出席：中澤専務理事、松本監事他9名

中澤専務理事より平成5・6年度の目標は平成6年10月に開催されるアジア大会を成功させることとし、これに全力を上げるので協力してほしい。懸案事項の解決のためにワーキンググループを設けて推進する。

【議事】

1．5年度事業日程の確認（大会日程の一部に諸会議が含まれているものがあったので、これを訂正し、試合日のみを表示した）

2．常務理事会日程変更

7月17日→7月10日

9月11日→9月18日

1月15日→　未定

常務理事会と全国理事会が同月に開催される場合（6・11・12月)、原則として全国理事会に集約する。

3．日本協会に関連する外郭団体役員分掌者は次の通り決定。

◇アジアハンドボール連盟

理　　事　　渡邊佳英

競技組織委員会委員　井　薫

コーチ方法委員会委員大西武三

医事委員会委員　西山逸成

◇日本オリンピック委員会

競技団体選出評議員　渡邊佳英

総務委員会委員　中澤重夫

選手強化本部委員　市原則之

主任強化コーチ　井　薫

◇日本体育協会

競技団体選出評議員　中澤重夫

スポーツ指導者連絡会議

競技団体選出委員　大西武三

国体委員会委員　清水　正

◇アジア大会　広島組織委員会

競技団体選出専門委員　山下泉

◇ユニバーシアード委員会

委員　中澤重夫

◇スポーツ安全協会

競技団体選出委員　荒川清美

4．各委員会委員について

(1)　会計委員長　殿水常務理事に委嘱

(2)　全委員会委員は再度調整をし、5月度常務理事会で承認、委嘱する。

5．平成5年度登録について

(1)　登録料はチーム登録料、オリンピック基金、機関誌購読料に分割せず一括を原則とする。

(2)　機関誌単独購読者の扱いについては従来の通りとする。

6．賛助会について

(1)　役員賛助会費…理事会決定通り5年度より徴収する。

(2)　会費納入時期変更…従来は各月々に加入・更新を行って来たが、今後は年度会費とし、4月に新規加入・更新を行うこととする。

7．審判委員会報告

スウェーデン・トップレフェリーによる審判講習会を5月14日に開催。　以上

■東北ブロック選出参事に加藤岳郎氏

本誌5月号に掲載した「日本協会役員」の記事中、未決定だった東北ブロック選出参事は加藤岳郎氏に決定しました。

■訂正とお詫び

本誌5月号でお知らせした役員名に誤りがありましたので、下記の通り訂正し、お詫び致します。

[訂正前]	[訂正後]
渡辺　佳英	渡邊　佳英
中沢　重夫	中澤　重夫
楠戸　榛久	楠戸　榛也

（財）日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第二三一号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可 平成五年三月二十六日 印刷 平成五年六月一日 発行
東京都渋谷区神南一－一－一
電話 代表 三四八一－二三六一
振替 東京 六－五八三四八番
編集兼発行人 中澤重夫

定価三百五拾円
（年間購読料三千三百円）